長崎県文化財調査報告書　第191集

長崎県埋蔵文化財調査年報14

〔平成17年度調査分〕

２００７

長崎県教育委員会

はじめに

長崎県内には，国指定特別史跡「原の辻遺跡（はるのつじいせき）」をはじめ多くの遺跡・埋蔵文化財があります。これらは，私たちが遠い祖先から受け継いできた貴重な文化遺産であり，現代に生きる私たちには，これらを地域の貴重な財産として，後世に保存・継承していくとともに，広く活用を図っていく責務があります。

そのため，本県においても，埋蔵文化財の発掘調査や現地説明会，「原の辻をもっと知ろう塾」など，埋蔵文化財の保護・活用に積極的に取り組んでいます。

本書は，平成 17 年度に県が中心となり，県下各地で実施した埋蔵文化財の発掘調査と遺跡の保護・保存・活用のための諸事業の概要を，年報として紹介するものです。

今後とも，県民の共有の財産である埋蔵文化財の保存・活用へのご理解をいただきますとともに，本書が広く活用されることを期待します。

平成１９年３月３１日

長崎県教育委員会教育長　　横田　修一郎

例　　言

1　本書は，長崎県における埋蔵文化財保護行政の現状と，長崎県教育委員会が平成17年4月1日から平成18年3月31日までに実施した16カ所の発掘調査の概要を収録したものである。
2　各遺跡の調査概要中の位置図は，国土地理院発行の地図を使用し，［　］内は図幅名を表す。
3　本書に掲載した遺跡には，県教育委員会が主体となって発掘調査したもの，市町村事業に伴い調査対応したもの，市町村教育委員会による発掘調査を支援したものを含む。
4　平成7年度分より，壱岐・原の辻遺跡調査事務所関係の発掘調査については，調査事務所の調査年報に概要を収録することにしている。
5　各遺跡の調査担当者と調査概要の文責については，文末に記した。
6　本書の編集は，長崎県教育委員会学芸文化課 文化財保護主事 和田政則が行った。

本 文 目 次

はじめに

Ⅰ　長崎県の埋蔵文化財の動向
一　埋蔵文化財保護行政の現状 …… 1
二　県事業について …… 2
三　県内の調査動向及び報告書一覧 …… 8
四　長崎県教育委員会発行調査報告書一覧 …… 11
五　事業別発掘調査届出件数及び県市町別埋蔵文化財職員数の推移 …… 18

Ⅱ　各遺跡の調査概要
平成17年度長崎県内発掘調査箇所 …… 19

① 万才町遺跡（長崎市）…20~22
② 焼山遺跡（佐世保市）…23~24
③ 門前遺跡（佐世保市）…25~30
④ 竹辺C遺跡（佐世保市）…31~32
⑤ 竹辺D遺跡（佐世保市）…33~34
⑥ 武辺城跡（佐世保市）…35~36
⑦ 稗田原遺跡（島原市）…37~38
⑧ 稗田原遺跡（島原市）…39~40
⑨ 稗田原遺跡（島原市）…41~43
⑩ 下宮遺跡（島原市）…44~46
⑪ 肥賀太郎遺跡（島原市）…47~49
⑫ 開遺跡（諫早市）…50~51
⑬ 小野条里遺跡（諫早市）…52~54
⑭ ヤボサ遺跡（西海市）…55~56
⑮ 魚洗川A・B遺跡（雲仙市）…57~58
⑯ 末永遺跡（佐々町）…59~60

Ⅰ　長崎県の埋蔵文化財の動向

一　埋蔵文化財保護行政の現状

1　埋蔵文化財保護行政をめぐる情勢

昨年度の本稿で，全国的にみた埋蔵文化財保護行政をとりまく状況の変化として，地方財政の逼迫にともなう人員削減・コストの縮減・民間活用・市町村合併をあげた。この流れは，平成 17 年度も引き続いていると言えよう。

2　市町村合併

本県では平成 17 年度末に，かつての 79 市町村から 23 市町となり，本県の平成の大合併は一段落したと言えよう。しかし，合併によって複数の埋蔵文化財専門職員をかかえるようになった市町（対馬市・壱岐市・松浦市・平戸市・島原市・南島原市）が誕生したかと思うと，職員は現状維持で，行政区だけが広くなった市町（長崎市・佐世保市・諫早市・五島市・新上五島町）が登場することにもなった。一方，合併しながらも埋蔵文化財専門職員が不在である市（西海市）も現れた。

3　埋蔵文化財保護行政の体制

本県の平成 17 年度の専門職員は市町村併せて 94 名で，平成 16 年度と大きな変化はなく，そのうちの 30 名が嘱託職員であることも同様である。平成 16 年度に西九州道路建設で増員された教職員と嘱託職員がそのまま維持されている形であった。

前述した西海市も含めた 1 市 5 町（時津町・江迎町・鹿町町・佐々町・川棚町）に専門職員が配置されていないものの，設置率は 73.9%と見かけ上の数字は前年度の 42%から大幅に増えた。

4　発掘調査事業量

西九州道路の建設に伴う本県の事業量の増加傾向は平成 16 年度も続いた。本調査分で約 9 億 9 千万円で，平成 15 年度より 2 億円ほど上回った。平成 17 年度の発掘調査事業量は 12 億 6 千万円ほどで，さらに前年度を上回る結果となっている。本県の事業量の増加の原因には，積極的な民間調査組織への委託もあげられよう。

5　権限移譲

平成 13 年 10 月に策定された「長崎県権限移譲推進計画」の最終年度であったが，平成 17 年度中の埋蔵文化財関係の権限移譲はなかった。本県では平成 19 年度から新たな権限移譲推進計画がスタートするため，埋蔵文化財保護行政にも新たな対応が求められる。

6　その他

平成 17 年 7 月 14 日に，壱岐市の国特別史跡「原の辻遺跡」の追加指定がなった。さらに県事業として県内の中近世城館跡の分布調査が始まった。

平成 17 年 11 月には，国史跡「日野江城跡」が北有馬町によって毀損されるという事件も起こった。

（古門）

二　県事業について

1　開発に伴う埋蔵文化財発掘調査

県学芸文化課では，各種開発行為に伴って現地踏査を行い，埋蔵文化財の取扱いについての協議を行って文化財保護の観点から試掘・範囲確認調査を実施している。その結果に基づいて遺跡保護のための協議を行うが，設計変更等でも遺跡を回避することができず，破壊されてしまう部分については，本発掘調査を実施している。

平成17年度，県学芸文化課が実施した試掘・範囲確認調査及び本調査は，次のとおりである。

【 試掘・範囲確認調査 】

遺跡名		所在地	調査原因
1	焼山遺跡	佐世保市	佐世保日野松浦線道路改良工事
2	稗田原遺跡	島原市	一般県道野田島原線道路改良工事
3	稗田原遺跡	島原市	一般県道野田島原線道路改良工事
4	下宮遺跡	島原市	一般県道野田島原線道路改良工事
5	魚洗川A・B遺跡	雲仙市	百花台広域公園拡張計画
6	開遺跡	諫早市	諫早飯盛線交通安全施設等整備工事
7	小野条里遺跡	諫早市	一般国道57号森山拡幅工事
8	ヤボサ遺跡	西海市	一般国道206号道路改良工事
9	末永遺跡	佐々町	西九州自動車道建設

【 本調査 】

遺跡名		所在地	調査原因
1	万才町遺跡	長崎市	県庁新別館増築事業
2	門前遺跡	佐世保市	西九州自動車道建設
3	竹辺C遺跡	佐世保市	西九州自動車道建設
4	竹辺D遺跡	佐世保市	西九州自動車道建設
5	武辺城跡	佐世保市	西九州自動車道建設
6	肥賀太郎遺跡	島原市	県道愛野島原線上流付替工事
7	稗田原遺跡	島原市	一般県道野田島原線道路改良工事

２　明日へつなぐ埋蔵文化財人づくり事業

本事業は，文化財担当者と開発部局担当者に埋蔵文化財に対する理解を深めてもらい，その取扱いについて具体的な情報を提供することにより，円滑な埋蔵文化財行政を推進する。併せて，埋蔵文化財担当者に専門的な知識を習得する場を提供することにより，埋蔵文化財の保護と活用を図ることを目的として実施している。

【 開発部局・文化財保護部局担当者埋蔵文化財基礎講座 】

期　日　平成 17 年 5 月 30 日（月）～ 31 日（火）

場　所　30 日：長崎県ＪＡ会館 7 階 702~704 会議室　31 日：出島交流会館 2 階研修室

対象者　① 県・市町村の開発事業計画及び実施担当者

② 市町村教育委員会文化財担当者

③ 市町村予算補助金等事務担当者

内　容　第 1 日目（参加数：108 名）

① 開発事業と埋蔵文化財保護行政について　（①～②：県学芸文化課）

② 埋蔵文化財の事務処理について 1

③ 埋蔵文化財保護行政の現状と展望　（文化庁記念物課文化財調査官　禰宜田　佳男）

第 2 日目（参加数：59 名）

① 長崎県中近世城館分布調査事業について　（①～⑤：県学芸文化課）

② 会計実施検査の指導事項等について

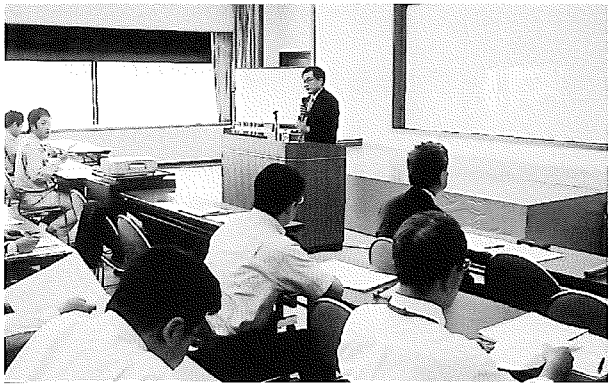
③ 埋蔵文化財の事務処理について 2

④ 補助金業務執行上の留意点について

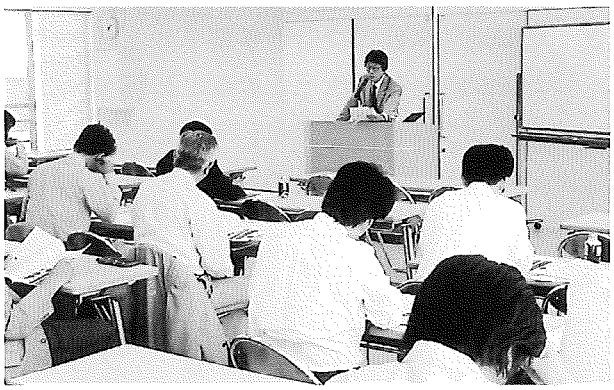
⑤ 出土品の管理について

⑥ 埋蔵文化財管理システムについて　（福岡市埋蔵文化財センター

主任文化財主事　常松　幹雄）



【第１日目：禰宜田　佳男調査官】



【第２日目：常松　幹雄 氏】

【 長崎県市町文化財担当者会議 】

期　日　平成 17 年 9 月 14 日（水）（参加数：52 名）

場　所　長崎教育事務所 7 階大会議室

対象者　市町村教育委員会文化財担当者

内　容　① 表彰候補者の推薦等について　（県学芸文化課　総務係）

② 国庫及び県費補助について　（県学芸文化課 文化企画班・埋蔵文化財班）

③ 会計実地検査事後調書等について　（県学芸文化課 埋蔵文化財班）

④ 長崎県中近世城館分布調査事業について　（県学芸文化課 埋蔵文化財班）

⑤ 伝統文化こども教室（文化庁行事）について　（県学芸文化課 教育文化班）

⑥ 第 2 回子ども伝統芸能大会等について　（県学芸文化課 教育文化班）

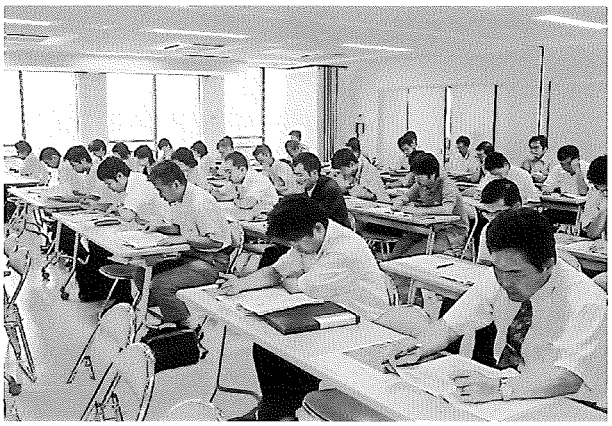
⑦ 登録記念物制度と文化的景観について

（文化庁記念物課文化財主任調査官　本中　眞）

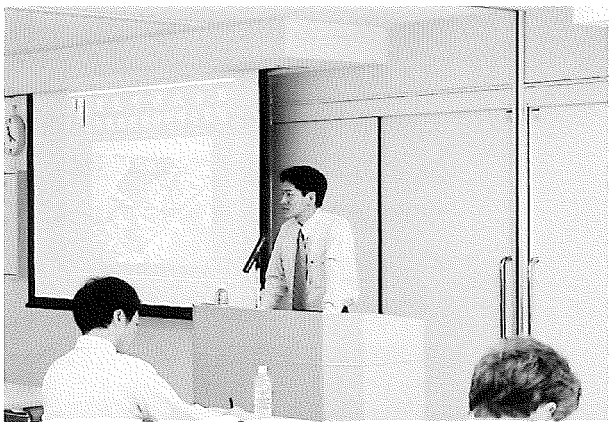
⑧ 事例発表

「国見町神代小路」重要伝統的建造物保存地区選定までの取り組みについて

（国見町教育委員会 柴崎 孝光）



【熱心に聴講する参加者】



【柴崎　孝光氏】

3　重要遺跡情報保存活用事業

県内 3,800 ヶ所を数える遺跡の発掘調査などをデジタル情報として整備し，また，県内重要遺跡について詳細な内容確認調査を実施して，各種開発と地域の文化遺産を活用するための基本資料として整備している。また，各開発に対する予備調査を国庫補助金事業を受けて実施し，開発事業との円滑な調整と，文化財を活かした地域文化の振興を図るため，平成 14 年度（～ 18 年度）より実施している事業である。

（1）遺跡情報システム整備事業

遺跡台帳と発掘調査で検出された遺構・遺物や写真・図面等の情報と調査履歴等をデータベース化して，開発調整や歴史教材の資料として活用する。また，遺跡の内容や調査履歴等の資料提示を迅速化させ，開発側との速やかな協議・調整を図るために実施している。

平成 17 年度は，遺跡地図データの作成を中心に作業を行った。

（２） 長崎県中近世城館分布調査事業

本県には，現在確認されている中近世の城館跡が約 300 箇所あるが，城館跡の範囲や性格，重要性などは充分に把握されておらず，諸所の開発計画との調整と将来の保存・活用のための資料整備が急がれている。

この事業は，平成 17 年度から平成 21 年度までの 5 カ年の継続事業で，城館跡の分布調査を早急に実施し，開発と文化財保護行政との調整を図り，その保存・活用に資することを目的とする。

初年度の平成 17 年度は，7 市 5 町・322 箇所の城館跡の悉皆調査及び 2 回の分布調査指導委員会を実施した。

【悉皆調査：松岳城跡（東彼杵町）】

【悉皆調査：久山城跡（諫早市）】

（３）開発事業関連予備調査

本事業は，分布調査（事業対象地区に遺跡が含まれているかの有無を，現地踏査によって判断する）試掘調査（事業対象地区に未周知の遺跡が存在しているのかどうかの有無を，発掘調査によって判断する）・範囲確認調査（事業対象地区に周知の遺跡が含まれ，埋蔵文化財に影響を与える行為が計画されている範囲を対象として発掘調査を行い，遺跡の範囲を確定する）などの予備調査を行い，開発事業との円滑な調整を図ることを目的とし，年間 4 遺跡程度，5 年間で 20 遺跡の調査を実施する計画である。なお，開発事業に伴う予備調査は，「文化財担当部局で負担することが望ましい」との文化庁の指導があり，調査のための経費については，国庫補助を受けて実施する。

平成 17 年度は，次の範囲確認調査を実施した。

遺跡名		所在地	調査原因
1	焼　山　遺　跡	佐世保市	佐世保日野松浦線道路改良工事
2	魚洗川Ａ・Ｂ遺跡	雲　仙　市	百花台広域公園拡張計画
3	ヤ　ボ　サ　遺　跡	西　海　市	一般国道 206 号道路改良工事

4　原の辻遺跡保存整備事業及び保存活用事業

中国の歴史書『魏志倭人伝』に記載された「一支國」。その王都に特定され，国特別史跡に指定された原の辻遺跡では，地域振興の核として活用するための保存整備事業及び保存活用事業を実施している。

（1）保存整備事業

①遺跡内の土地公有化　②調査研究事業(発掘調査)

平成 17 年度の調査研究事業では，平成 8 年度以来，調査が行われていなかった船着き場跡の範囲確認調査と不條・高元地区の補完調査を行った。

船着き場跡の調査は，平成 8 年度実施されていたが，その時の調査は農道と農業用水路の敷設に係るものであったことから，東西突堤と南北石組み遺構の一部を確認するにとどまっていた。そこで，平成 17 年度は，正確な船着き場跡の範囲や周辺の状況を明らかにすることを目的として実施した。成果は下記のとおりである。

【船着き場跡】

船着き場跡は，北側部分の河道の川幅が約 35 mあること，南側では水路によって区画されることから，南北長さ約 38 mの規模をもつことが推定された。船着き場跡の東側に水路を構築していたことが確認され，水路には河川の水を引き込み，船着き場跡の東側沿いに流れるようにしたと考えられる。水路をめぐらすことにより，船着き場跡を出島状に区画する意識があったものと考えられ，遺跡の中心部(丘陵側)への通路としては，今回の調査以前は土橋と考えられていたが，木橋等を架けた可能性がある。水路の構築に際しては，礫を多用しており，水路の掘削や石組みなど大掛かりな工事となっている。

調査の意義としては，今回の調査で船着き場跡の南側の範囲が想定でき，さらに船着き場跡の東側に水路がもうけられるなど形状を具体的に示す結果となった。船着き場跡は，蛇行した河川に張り出した自然地形をうまく利用して，大陸系の最新土木技術によって２本の突堤を築き，水路をめぐらす等弥生時代中期の段階に大掛かりな土木工事で造られたことが明らかになった。

【不條地区】

旧河川が，かなり蛇行しながら流れていたことがわかった。川幅は各時期によりかなり変化しており，旧河川の中に中州状の堆積が確認される。層位から少なくとも 3 時期の土層の堆積が認められ，Ⅰ期が弥生時代中期前葉から後期初頭，Ⅱ期が弥生時代後期中葉から後半，Ⅲ期が弥生時代終末期以降である。Ⅰ期の層位中から大型の建築部材等が出土している。

【高元地区】

昭和 26 年から 39 年にかけて九学会・東亜考古学会により調査が実施され，墓域の存在が確認されていたことから，再確認するために調査区を設定した。調査の結果，数基の小児甕棺が出土し，弥生時代後期に墓地が形成されたことが判明した。また，この墓地が形成される以前には，2 条の溝が確認され環濠の一部になる可能性もある。この 2 条の溝を埋めた後，墓地を形成している事が判明した。

（２）保存活用事業

① 原の辻遺跡調査事務所及び壱岐・原の辻展示館の管理運営

② 調査指導委員会の開催〔第１回平成 17 年 8 月 1 日(月)，第 2 回平成 17 年 11 月 15 日(火)〕

③ 「要覧」「原の辻ニュースレター（第 22 ～ 24 号)」の発行

④ 出土遺物の複製・保存処理

⑤ 調査記録ビデオの作製

⑥ 三姉妹遺跡（原の辻遺跡・吉野ヶ里遺跡・平塚川添遺跡）連絡会議及び交流事業

⑦ ホームページの管理運営

⑧ 原の辻ボランティアガイド養成講座「Dr. ハルの原の辻壱岐活き塾」

第１回･･･6 月 13 日(月) 金原 正明(奈良教育大学助教授)「弥生のトイレ事情」
会場：壱岐文化ホール中ホール

第２回･･･7 月 14 日(木) 渡辺 誠(山梨考古博物館長・名古屋大学名誉教授)「弥生のレシピ」
会場：壱岐文化ホール中ホール

第３回･･･8 月 18 日(木) 石井　忠(古賀市歴史資料館長)「漂着物ものがたり」
会場：長崎県立壱岐高校視聴覚教室

第４回･･･9 月 22 日(木) 分部 哲秋(長崎大学医学部講師)「弥生人骨が語る一支国のすがた」
会場：壱岐文化ホール中ホール

第５回･･･10 月 8 日(土) 原の辻遺跡調査事務所と壱岐市教育委員会文化財課職員による原の辻遺跡内の発掘体験，壱岐島内の史跡見学

第６回･･･11 月 17 日(木) 松井　章（独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所・埋蔵文化財センター遺物調査技術研究室長)「イキイキ動物ランド」
会場：長崎県立壱岐高校視聴覚教室

(村川)

【第５回　壱岐島内の史跡見学】

【第６回松井 章先生「イキイキ動物ランド」】

5　日韓交流史理解促進事業

平成 13 年度より始まった日韓の文化財担当者の相互交流の最終年である。本事業のまとめと成果の公開という意味で, 12 月 17 日に九州国立博物館ミュージアムホールにてシンポジウムを開催した。当日は雪であったが 175 名の聴講者があった。また, 年度末には同事業の調査研究報告書を刊行した。

(古門)

三　県内の調査動向及び報告書一覧

1　調査動向

旧石器時代

雲仙市(旧南高来郡瑞穂町)の「伊古遺跡」は島原半島北端に位置し，標高約 20m の扇状地状の水田地帯に広がる。本調査において，2 箇所の細石器文化包含層が発見された。C 区は舌状丘陵脇の崖下，中世墓域の下層で検出された。土層確認のトレンチを 2 箇所設定した結果，5 点の黒色黒曜石製細石核及び数点の細石刃を確認している。細石核は剥片素材の粗い調整を施したブランクを形成するものが多く，西海技法の範疇におさまるものである。火山灰分析の結果では，細石器出土層からは桜島薩摩テフラ(Sz-S)の可能性がある火山ガラスが検出されている。200m ほど離れた D2 区は，同じ舌状丘陵脇の崖下から検出され 25 ㎡の範囲から 2,000 点を超す遺物が検出されている。主な遺物は細石核 40 点，細石刃約 400 点，細石刃剥離第一スポール 13 点，石斧 1 点，石鏃(？)1 点，土器数点である。出土層位は C 区と同様であり，ほぼ同時期のものと考えられる。石器はいずれも剥片素材で泉福寺 10 類層型と呼ばれるタイプのものや百花台遺跡(田川編 1994)に見られるような雲仙普賢岳産出の黒曜石の分割礫を使用した細石核も検出されており，多彩なバリエーションがある。土器は雲仙市小ヶ倉Ａ遺跡(辻田・竹中 2003)出土の薄手で胎土の良好なもの(押引文 or 押圧文)に類似するが文様部は今のところ確認できない。

C 区・D2 区から検出された細石器は出土層位やその内容からほぼ同時期のもので，比高差約 5m を測る丘陵の崖下に営まれた遺跡と考えられる。年代的には細石器文化最終末に位置づけられ，細石核の様々なバリエーションから，島原半島の細石器文化終末期の様相を垣間見ることができる。島原半島北部は雲仙市国見町に流れる土黒川流域に細石器文化期の遺跡が集中する(川道 2005)。これまでは標高の高い(200 m程)地点での検出例が多かったが，今回低標高でまとまった資料が検出された意義は大きい。

佐世保市では市町村合併の施策で市域が広がり，所在する洞穴遺跡の数も旧佐世保市 12 ヵ所，旧吉井町 5 ヵ所，旧世知原町 4 ヵ所，旧小佐々町の 1 ヵ所の計 22 ヵ所となった。これにより長崎県北部一帯の洞穴遺跡群は 1 市にまとまり，洞穴遺跡の実態を把握するために総合調査を行うこととなった。平成 17 年には「池野谷洞穴」「中谷洞穴」「不動明王岩陰」「牧ノ岳洞穴」「直谷岩下洞穴」「大岩洞穴」の確認調査が行われ，「不動明王岩陰」については決定的ではないものの，遺物包含層が認められる茶褐色粘質土層が，この岩陰の基盤直上の地層で有機質を全く含まないことから，旧石器に属する可能性があるとされた。

縄文時代

島原市に所在する「肥賀太郎遺跡」は島原半島北東部に位置し，標高約 270m の火山性山麓扇状地に立地する。1,700 ㎡という比較的狭い遺跡範囲から縄文時代晩期を中心とした土器・石器が 12,000 点出土した。土層は 6 層に大別でき，Ⅱ～Ⅳ層は縄文時代晩期の遺物包含層である。Ⅳ層下部とⅤ層からは縄文時代早期の押型文土器が出土しているが，出土土器の割合からすれば約 99 %以上を晩期の土器が占め単純遺跡の様相を呈している。黒川式併行期の土器がまとまって出土しているが，さらに近隣の稗田原遺跡，畑中遺跡，百花台遺跡，礫石原遺跡，中木場遺跡などと検討を加え，島原半島

北東部での縄文時代晩期を 3 期に分け，肥賀太郎遺跡を 2 期から 3 期に位置づけている。また，晩期・黒川式土器の土器圧痕からはコクゾウムシや，イネ科植物の種子圧痕，シソ・エゴマなどが検出されており，とくにコクゾウムシの存在は,この時期における島原半島の栽培穀物の有り様を示している。

弥生時代

壱岐市「原の辻遺跡」の調査研究事業は，環濠に囲まれた丘陵部の北端で高元地区の補完調査を，西側低地部の不條地区で船着き場跡の範囲確認調査を行った。調査成果としては，不條地区では旧河川跡の流路が再度確認され，かなりの蛇行を伴いながら流れていたことがわかった。また，川幅は各時期によりかなり変化しており，旧河川のなかにテラス状の堆積が確認される部分もある。旧河川跡の層位から，少なくとも 3 時期の土層の堆積が推察される。Ⅰ期が弥生時代中期前葉から後期初頭，Ⅱ期が弥生時代後期中葉から後半，Ⅲ期が弥生時代終末期以降である。護岸遺構の対岸部では，護岸遺構とほぼ同じような構造の集石遺構が確認された。また，この地点から南西側に伸びる新たな河川跡(2号河川跡)が検出され，旧河川跡より新しい流れであることが確認された。船着き場跡の調査では，船着き場の河川の幅が約 35m あることが確認され，他の調査区の河川の幅よりも一段と広いため，船着き場を築造する条件を十分に満たした川幅であることがわかった。また，船着き場の東側に水路を構築していたことがわかり，水路に河川の水を引き込み，迂回させて東側河川に流し込んだと推測される。水路の幅は約 9m，7 区で約 1.2m を測る。その結果，船着き場跡は，まわりに水路をめぐらす島状の地形となり，丘陵部への通路として木橋の可能性が考えられる。そして，水路の構築に際しては人頭大よりやや小さい角礫を多用しており，水路の掘削や石組みなど大掛かりな工事を行っている。石を敷いた水路としては日本で最も古いと思われる。また，船着き場の南側には平場があり，南側は水路で区画されていることから，南北の大きさは，南石垣の北側の上端まで長さ約 38m の規模となる。遺跡の主体となる丘陵部の北端では，北側の A 地区から数基の小児甕棺墓が確認され，弥生時代後期前半に墓地が形成されたことが判明した。また，A 地区からは，弥生時代中期中葉から後期前半にかけて 3 条の溝が検出されており，丘陵先端部の最も内側をめぐる溝と考えられる。幅や深さから推測すると，防御的な性格は薄く，区画溝もしくは排水路としての機能が考慮される。

A 地区の北側斜面には，3 度にわたるテラス状の造成面が観察され，その下には柱穴が検出されている。また，A 地区北側の掘削も造成層のなかに岩盤の風化礫などが混入することなどから，弥生後期前半までに造成が行われた可能性が強い。溝の掘削やテラス状の造成などの際は，岩盤を削るなどかなりの労力を要する作業が行われており，弥生時代中期中葉から後期前半にかけて，それを指揮する求心的な有力者の存在が推測される。一段高い B 地区は表土の直下に岩盤があり包含層はほとんどなく，遺構も検出されなかった。

松浦市「久保園遺跡」では，弥生時代中期前半の甕棺墓を 3 基と溝状遺構を 2 基検出した。他に掘立柱建物跡も検出し，弥生時代から中世の複合遺跡だと考えられている。

中世・近世

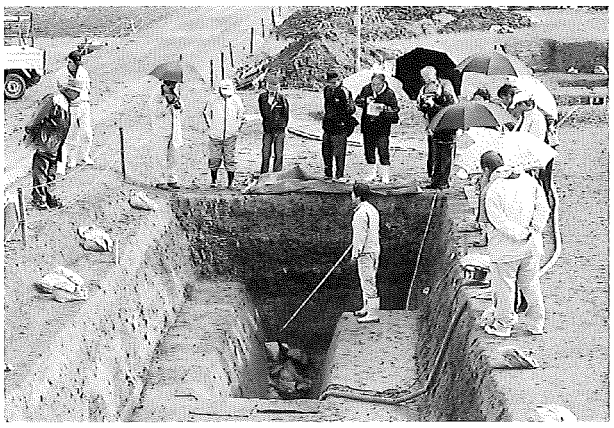
雲仙市(旧南高来郡瑞穂町)の「伊古遺跡」では，龍泉窯系青磁を副葬した中世の土坑墓と集落が検出されており，他に同安窯系青磁，土師器，瓦器等が出土している。

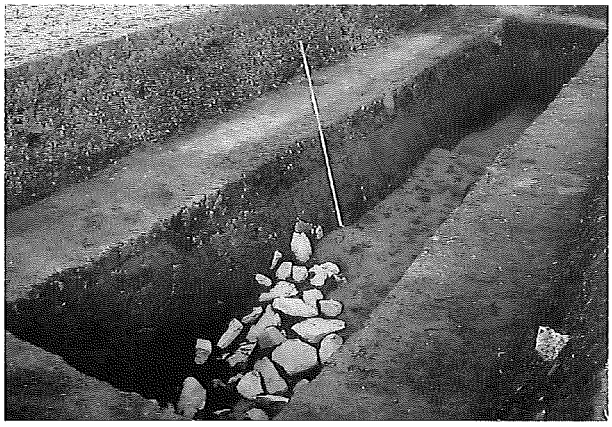
南島原市(旧南高来郡南有馬町)に所在する国指定史跡「原城跡」では，本丸大手門において門正面石垣の隅角部や溜め枡遺構を検出した。また，花十字紋瓦，陶磁器，一揆軍のものと思われる多量の人骨などが出土した。

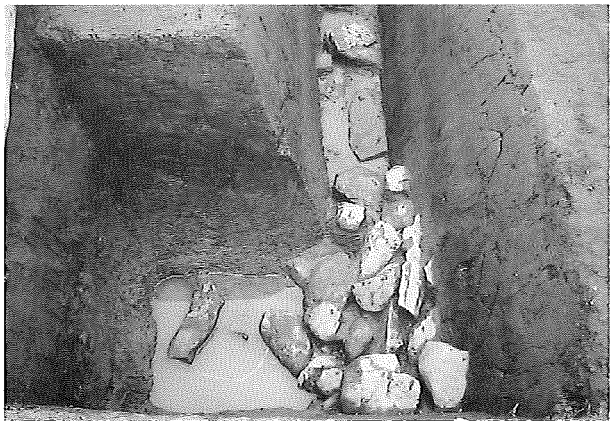
波佐見町中尾郷所在の「大新登窯跡」では，2004 年・2005 年の 2 箇年に亘り発掘調査を実施し，8 室分の窯室と物原を検出している。物原出土品から，いわゆる「くらわんか手」製品を主体的に生産していたことが明らかになった。また，地形測量と文書史料から，幕末期，当窯が窯室数 39 室，全長約 170 mを測る世界最大規模の登り窯であったことが判明している。

長崎市の「万才町遺跡」は，長崎県庁が立地する標高約 11 ～ 15 mの細長い台地の先端付近に所在する。県庁新別館増築工事に伴う調査であり，180 ㎡という狭い調査面積にもかかわらず，キリシタンの遺物であるクルス，中国景徳鎮産の磁器，肥前陶器など多量の遺物が出土した。遺構については，寛永・寛文の大火と，その後の建物の解体に伴ったとみられる廃棄土坑や，溝・井戸・ピットなどの遺構群を検出した。調査区東側では寛文年間の火災以降の遺構群を検出したが，それ以前の遺構については残存状況は良好ではなかった。調査区西側では寛永期や慶長期の可能性のある遺構群を検出し，なかでも長崎の町建て期の溝状遺構や地下室と思われる遺構もみつかっており注目される。

（村川・辻田・竹田）







【原の辻遺跡船着き場跡　現地説明会】

2　報告書一覧

No.	報　告　書　名	発行機関
1	長崎県埋蔵文化財調査年報 13 －平成 16 年度調査分－ （長崎県文化財調査報告書 第 187 集）	長崎県教育委員会
2	地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅲ （長崎県文化財調査報告書 第 188 集）	長崎県教育委員会
3	肥賀太郎遺跡－県道愛野島原線上流付替工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－ （長崎県文化財調査報告書 第 189 集）	長崎県教育委員会
4	門前遺跡Ⅱ－一般国道 497 号佐々佐世保道路埋蔵文化財発掘調査報告書－ （長崎県文化財調査報告書 第 190 集）	長崎県教育委員会
5	原の辻遺跡－主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書③－ （原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第 32 集）	長崎県教育委員会
6	原の辻遺跡－原の辻遺跡調査研究事業調査報告書－ （原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第 33 集）	長崎県教育委員会
7	興善町遺跡－長崎消防局中央消防署新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	長崎市教育委員会
8	佐世保の洞窟遺跡－洞穴遺跡総合調査報告書－ （平成 17 年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書）	佐世保市教育委員会
9	風観岳支石墓群 （諫早市文化財調査報告書 第 19 集）	諫早市教育委員会
10	三城城跡範囲確認調査報告書－平成 16 年度調査までの総括－ （大村市文化財調査報告書 第 29 集）	大村市教育委員会
11	市内遺跡発掘調査報告書Ⅴ－平戸市の文化財 56 －	平戸市教育委員会
12	松浦市内遺跡確認調査(6) （松浦市文化財調査報告書 第 21 集）	松浦市教育委員会
13	双六古墳 （壱岐市文化財調査報告書 第 7 集）	壱岐市教育委員会
14	覩城跡・車出遺跡 －市内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査－ （壱岐市文化財調査報告書 第 8 集）	壱岐市教育委員会
15	特別史跡　原の辻遺跡－史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査－ 原ＸＶ・原ＸⅣ区・高元Ⅲ区・高元Ⅳ区・石田大川 604 区・石田大川 605 － 1 区 （壱岐市文化財調査報告書 第 9 集）	壱岐市教育委員会
16	龍王遺跡（倉地川古墳）－国見中部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査概要－ （雲仙市文化財調査報告書 第 1 集）	雲仙市教育委員会
17	長与三彩発掘調査報告書 （長与町文化財調査報告書 第 8 集）	長与町教育委員会
18	麻生瀬遺跡 （川棚町文化財調査報告書 第 1 集）	川棚町教育委員会
19	大新登窯跡 （波佐見町文化財調査報告書 第 17 集）	波佐見町教育委員会

四　長崎県教育委員会発行調査報告書一覧

集	報　告　書　名	発行年
1	長崎県遺跡地名表(埋蔵文化財包蔵地一覧)	1962
2	五島遺跡調査報告	1964
3	民俗資料調査報告書	
4	福井洞穴調査報告(図録編)	1966
5	深堀遺跡	
6	男女群島特別調査報告	1968
7	宮下遺跡調査報告(図録編)	1968
8	対馬－豊玉村佐保シゲノダン・唐崎の青銅器を出土した遺跡の調査報告	1969
9	宮下遺跡調査報告(解説編)	
10	堂崎遺跡調査報告書（長崎県長与町所在）	1970
11	有明海沿岸地区の民俗	1972
12	長崎県の民家（前編・後編）	1972
13	対馬西岸阿連・志多留の民俗	1972
14	里田原遺跡(図録)	
15	下五島貝津・大串の民俗（本文編・図録編）	1974
16	対馬の文化財	
17	対馬－浅茅湾とその周辺の考古学調査－	1974
18	里田原遺跡(略報Ⅱ)	1974
19	壱岐の文化財	
20	対馬の遺跡	1975
21	里田原遺跡	1975
22	下五島の文化財	
23	長崎県民俗地図	1976
24	諫早北バイパス関係埋蔵文化財調査報告第１集（図録編）	1975
25	里田原遺跡	1976
26	原の辻遺跡	1976
27	西彼杵半島猪垣分布調査概観	1977
28	平戸市野子地域の民俗・福島町土谷の民俗（上・下）	1977
29	長崎県のカトリック教会	1977
30	旧島原藩薬園跡環境整備報告	1977
31	原の辻遺跡Ⅱ－長崎県壱岐郡所在の弥生遺跡－	1977
32	里田原遺跡	1977
33	金石城跡緊急発掘調査報告書	1977
34	長崎県の民俗芸能・民謡（Ⅰ）採譜篇・別冊	
35	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅰ	1978

集	報　告　書　名	発行年
36	世知原町開作免の民俗	1978
37	原の辻遺跡Ⅲ－長崎県壱岐郡所在の弥生遺跡－	1978
38	里田原遺跡	1978
39	日蘭関係資料	1979
40	平戸・上五島地区の文化財	1979
40-2	平戸・上五島地区の文化財（美術工芸品の部）	1979
41	長崎県の民俗芸能・民謡（Ⅱ）採譜篇	1979
42	長崎県の海女（海士）	1979
43	長崎県の民俗芸能・民謡（Ⅲ）	1979
44	松浦市とその周辺地区の文化財	1979
45	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅱ	1979
46	大村湾の漁労習俗	1980
47	長崎県の民俗芸能・民謡（Ⅳ）	1980
48	キリシタン関係資料	1980
49	佐世保市とその周辺地区の文化財	1979
50	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅲ	1980
51	串島遺跡	1980
52	ケイマンゴー遺跡	1980
52-a	長崎県の民俗芸能・民謡（Ⅴ）	1981
53	諫早・大村・北高来郡の文化財	1981
54	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ	1981
55	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅳ	1981
56	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ	1982
57	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅴ	1982
58	堂崎遺跡－長崎県有家町所在の海中干潟遺跡－	1982
59	島原・南高の文化財	1982
60	針尾人崎遺跡－佐世保市針尾中町所在－	1982
61	長崎唐寺関係所蔵品目録	1982
62	長崎・西彼の文化財	1983
63	橘湾の漁労習俗	1983
64	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ	1983
65	諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ	1983
66	長崎県文化財調査報告書埋蔵文化財Ⅵ	1983
67	長崎県文化財調査報告書埋蔵文化財Ⅶ	1984
68	今福遺跡Ⅰ　県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 第一冊	1984
69	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅳ	1984
70	長崎県の農具調査（前編）	1985

集	報　告　書　名	発行年
71	名切遺跡	1985
72	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅴ	1985
73	西ノ角遺跡	1985
74	諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ	1985
75	長崎県埋蔵文化財集報Ⅷ	1985
76	楼楷田遺跡　松浦火力発電所建設に伴う埋蔵文化財調査報告書	1985
77	今福遺跡Ⅱ　県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 第二冊	1985
78	百花台遺跡	1985
79	長崎の近世社寺築　近世社寺建設緊急調査報告書	1986
80	長崎県の農具調査（後編）	1986
81	上原遺跡	1986
82	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅸ	1986
83	殿崎遺跡	1986
84	今福遺跡Ⅲ　県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 第三冊	1986
85	諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告Ⅲ	1986
86	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅹ	1986
87	長崎県遺跡地図	1987
88	長崎県の民謡	1987
89	温泉岳　保存管理計画策定書	1988
90	中道壇遺跡	1988
91	長崎県埋蔵文化財調査報告書ⅩⅠ	1988
92	百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	1988
93	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅵ	1989
94	長崎県埋蔵文化財調査集報ⅩⅡ	1989
95	魚洗川Ｂ遺跡－全国植樹祭会場造成工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－	1990
96	長崎県の諸職調査	1990
97	長崎県埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ	1990
98	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅶ	1990
99	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅷ	1991
100	礫石原遺跡－県道愛野～島原線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－	1991
101	長崎県埋蔵文化財調査報告書ⅩⅣ	1991
102	対馬天然記念物緊急調査報告書	1991
103	長崎県天然記念物実態調査報告書－対馬を除く－	1991
104	長崎県埋蔵文化財調査集報ⅩⅤ	1992
105	上大垣遺跡	1992
106	県内古墳詳細分布調査報告書	1992
107	大陸渡来文物緊急調査報告	1992

集	報　告　書　名	発行年
108	長崎県埋蔵文化財調査集報ＸⅥ	1993
109	県内重要遺跡範囲確認調査報告書	1993
110	長崎県遺跡地図－長崎市・諫早市・大村市・西彼杵郡・北高来郡地区－	1994
111	長崎県遺跡地図－島原市・南高来郡地区－	1994
112	長崎県遺跡地図－壱岐地区－	1994
113	長崎県埋蔵文化財調査年報Ⅰ	1994
114	県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅱ	1994
115	中木場遺跡－水無川第３遊砂地造成工事に伴う発掘調査報告書－	1994
116	県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	1994
117	長崎県遺跡地図－福江市・南松浦郡地区－	1995
118	長崎県遺跡地図－対馬地区－	1995
119	長崎県遺跡地図－佐世保市・平戸市・松浦市・北松浦郡・東彼杵郡地区－	1995
120	長崎県の民俗芸能－長崎県民俗芸能緊急調査報告書－	1995
121	県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅲ	1995
122	長崎県埋蔵文化財調査年報Ⅱ	1995
123	万才町遺跡　長崎県庁新別館建替えに伴う発掘調査報告書	1995
124	原の辻遺跡	1995
125	長崎県埋蔵文化財調査年報Ⅲ	1996
126	伊木力遺跡Ⅰ	1996
127	黒丸遺跡Ⅰ－都市計画道路杭出津・松原線改良工事に伴う発掘調査報告書－	1996
128	中木場遺跡Ⅱ－水無川４号遊砂地造成工事に伴う工事立会調査－	1996
129	中木場遺跡Ⅲ－水無川１号ダム建設工事に伴う緊急発掘調査－	1996
130	県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅳ	1996
131	長崎奉行所関係文書調査報告書	1997
132	黒丸遺跡Ⅱ	1997
133	県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅴ	1997
134	伊木力遺跡Ⅱ	1997
135	長崎県埋蔵文化財調査年報Ⅳ	1997
136	稗田原遺跡Ⅰ	1997
137	広平遺跡	1997
138	桟原城遺跡	1997
139	石田城跡	1997
140	長崎県の近代化遺産－長崎県近代化遺産総合調査報告書－	1998
141	大浜遺跡	1998
142	蒲河遺跡	1998
143	沖城跡	1998
144	桜町遺跡	1998

集	報　告　書　名	発行年
145	稗田原遺跡Ⅱ	1998
146	長崎奉行所（立山役所）跡	1998
147	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅰ	1998
148	長崎県埋蔵文化財調査年報５	1998
149	馬乗石遺跡	1998
150	長崎県埋蔵文化財調査年報６	1999
151	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅱ	1999
152	稗田原遺跡Ⅲ	1999
153	長崎県のカクレキリシタン－長崎県のカクレキリシタン習俗調査事業報告書－	1999
154	長崎街道－長崎県歴史の道（長崎街道）調査事業報告書－	2000
155	長崎県埋蔵文化財調査年報７	2000
156	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅲ	2000
157	稗田原遺跡Ⅳ	2000
158	長崎県埋蔵文化財調査年報８	2001
159	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅳ	2001
160	平野遺跡	2001
161	稗田原遺跡Ⅴ	2001
162	栄町遺跡	2001
163	石田城跡Ⅱ	2001
164	長崎県埋蔵文化財調査年報９	2002
165	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅴ	2002
166	森岳城跡	2002
167	玖島城跡	2002
168	千里ヶ浜遺跡	2002
169	歴史の道整備活用推進事業　長崎街道整備活用計画報告書	2002
170	長崎県の祭り・行事調査報告書	2002
171	長崎県埋蔵文化財調査年報10	2003
172	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅵ	2003
173	森岳城跡Ⅱ	2003
174	供養川遺跡	2003
175	長崎県埋蔵文化財調査年報11	2004
176	地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅰ	2004
177	長崎奉行所（立山役所）跡－歴史文化博物館（仮称）建設に伴う発掘調査報告書－	2004
178	今屋敷家老屋敷跡	2004
179	下木場遺跡	2004
180	日蘭関係資料Ⅱ～県外編～	2004
181	長崎県の近代和風建築－長崎県近代和風建築総合調査報告書－	2004

集	報　告　書　名	発行年
182	長崎県埋蔵文化財調査年報12	2005
183	長崎奉行所（立山役所）跡　岩原目付屋敷跡　炉粕町遺跡 －歴史文化博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（下）－	2005
184	出　島－一般国道499号線電線共同溝整備工事に伴う緊急調査報告書－	2005
185	地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅱ	2005
186	小野Ｆ遺跡－一般国道497号佐々佐世保道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	2005
187	長崎県埋蔵文化財調査年報13	2006
188	地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅲ	2006
189	肥賀太郎遺跡－県道愛野島原線上流付替工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－	2006
190	門前遺跡－一般国道佐々佐世保道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－	2006

五　事業別発掘調査届出件数及び県市町別埋蔵文化財職員数の推移

○ 事業別発掘調査届出件数の推移

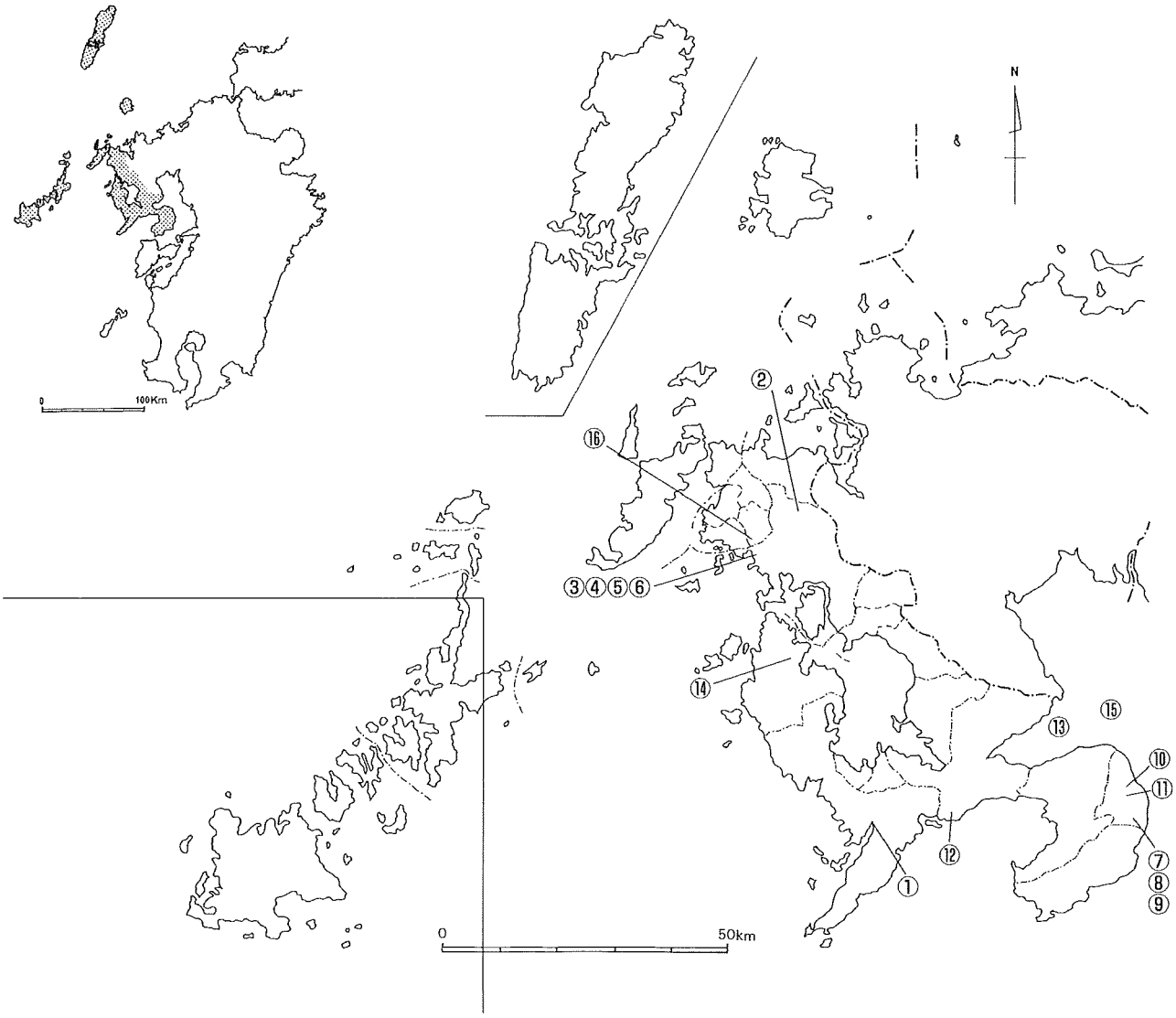
		平成 12 年	平成 13 年	平成 14 年	平成 15 年	平成 16 年	平成 17 年
緊急調査	道路	8	7	6	１０	１２	１３
	河川	1	0	0	1	1	0
	学校	1	1	1	1	0	0
	住宅･宅地造成	１３	3	3	5	4	4
	工場	3	0	0	0	0	0
	店舗等	5	0	0	0	1	1
	その他建物	１３	2	4	1	4	3
	土地区画整理	0	0	0	0	0	0
	公園造成	1	0	1	1	0	0
	観光開発	1	0	0	0	0	0
	ガス等	2	3	2	2	2	0
	農業関係	２１	9	4	6	9	6
	その他開発	8	2	2	3	1	0
	自然崩壊	0	0	0	0	1	0
	遺跡地図作製等	0	0	0	0	0	0
	保存目的	6	１３	１４	１８	２４	１９
	遺跡整備	0	2	2	0	2	0
学術・研究		7	8	6	2	3	1
合計		９０	５０	４５	５０	６４	４７

○県市町別埋蔵文化財担当職員数の推移

（　）は嘱託数

	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度
県	１７（　７）	１６（　５）	１７（　５）	１８（　５）	２２（１３）	２２（１７）
市　町	４２（　４）	４３（　５）	４７（１０）	４３（１２）	４２（１０）	４６（１０）

Ⅱ　各遺跡の調査概要



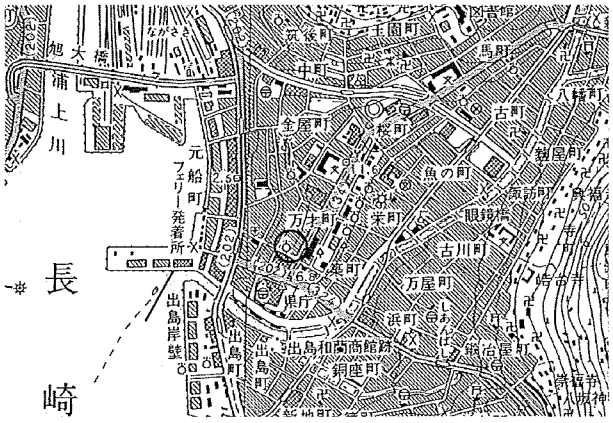
遺跡名		所在地	遺跡名		所在地
①	万才町遺跡	長崎市	②	焼山遺跡	佐世保市
③	門前遺跡	佐世保市	④	竹辺C遺跡	佐世保市
⑤	竹辺D遺跡	佐世保市	⑥	武辺城跡	佐世保市
⑦	稗田原遺跡	島原市	⑧	稗田原遺跡	島原市
⑨	稗田原遺跡	島原市	⑩	下宮遺跡	島原市
⑪	肥賀太郎遺跡	島原市	⑫	開遺跡	諫早市
⑬	小野条里遺跡	諫早市	⑭	ヤボサ遺跡	西海市
⑮	魚洗川A・B遺跡	雲仙市	⑯	末永遺跡	佐々町

① 万才町遺跡（まんざいまちいせき）

所 在 地	長崎市万才町	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	県庁新別館増築工事	**調査面積**	180 ㎡
調査期間	平成18年2月15日～3月31日	**調査区分**	本調査
報 告 書	平成19年3月刊行予定	**処　　置**	調査後埋め戻し

立　地

万才町遺跡は，中島川河口部の河岸段丘上に立地する。現在は埋め立てにより陸化しているものの，中世以前には低地部に海水が進入し，遺跡の位置する河岸段丘は海に突き出す岬状を呈していたものと考えられる。遺跡はこの岬の先端部付近に位置している。付近には，当時の海外への窓口であった出島があり，遺跡の位置する岬とは橋でつながれていたことがわかっている。



万才町遺跡位置図［長崎東南部］(S=1/25,000)

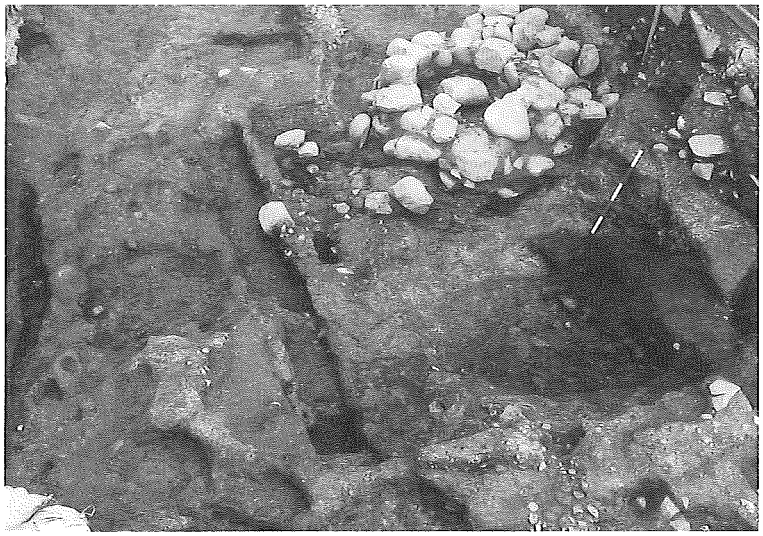
調　査

調査は，県庁新別館増築工事にかかる 180 ㎡について実施した。今回の調査区東隣は 1993 年に発掘調査が実施されており，火災面やこれに伴う整地層を鍵層として，Ⅰ期～Ⅵ期に至る近世長崎の遺構群の変遷を初めて明らかにした点で画期的な調査であった。今回の調査でも，寛永年間や寛文年間の火災層や整地層を鍵層として遺構面の把握に努めたものの，後世の撹乱などの影響で調査区一面に鍵層が展開しておらず，平面方向にも垂直方向にも遺構群が著しく切り合っていることが明らかとなった。そこで，調査区中央付近に東西方向のベルトを残し，土層の観察を丹念に行って遺構群の切り合いを確認しながら調査を行った。遺構群は，寛永・寛文の大火とその後の建物の解体に伴うとみられる廃棄土坑を中心に，溝や井戸・ピットなど 102 基を検出した。調査区の東側では，寛文年間の火災以降の遺構群が密集しており，これ以前にさかのぼる遺構群の残存状況はよくなかった。これに対

作業風景

東西ベルト土層

して，調査区西側では寛永期や慶長期にさかのぼる可能性のある遺構群を，比較的良好な状態で検出した。特に，溝状遺構は，近世長崎の町建て時の可能性がある遺構として注目されるものである。遺物では，地下室と考えられるSK4から，大量の焼土や瓦類と共に，十字架(クルス)が出土しており，キリシタン関連遺物として注目される。このほか，肥前陶磁をはじめとする陶磁器類やガラス製品・金属製品などが大量に出土した。

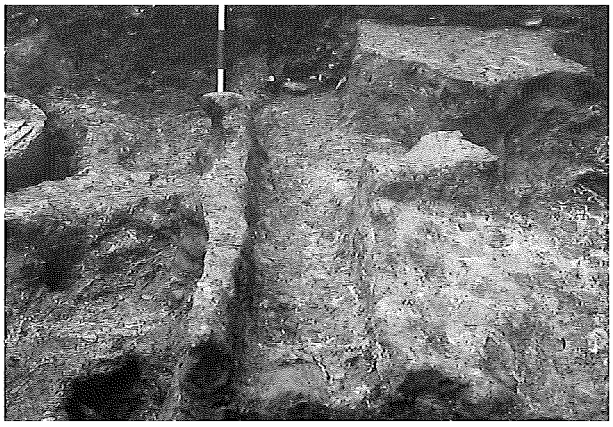


調査区完掘状況

地下室(SK4)遺物出土状況

地下室(SK31)床面の状況

廃棄土坑(SK38)検出状況



溝状遺構(SD1)完掘状況

地下室(SK4)クルス出土状況

廃棄坑(SK45)銭出土状況

まとめ

今回の調査では，慶長期～寛文期を中心とした遺構群を検出したが，1993 年調査時の遺構群よりも残存状況がよくなく，特に建物遺構については規模や構造など不明な点が多い。一方で，地下室とみられる土坑やキリシタン関連遺物などは，近世長崎の特色を反映した遺構・遺物といえよう。

【調査担当：川口・中尾】（文責：中尾）

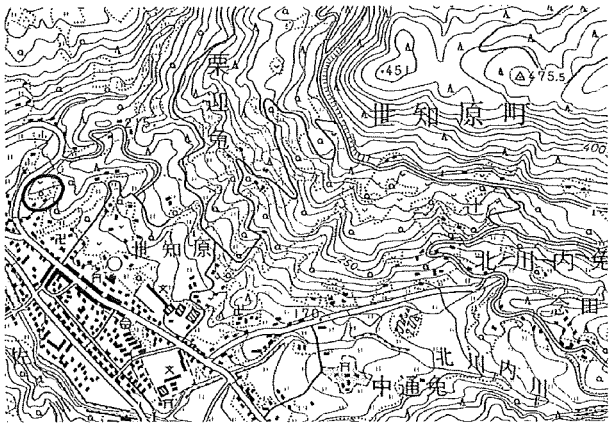
② 焼山遺跡（やきやま）

所 在 地	佐世保市世知原町栗迎字路木場	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	主要地方道佐世保日野松浦線道路改良	**調査面積**	8 ㎡
調査期間	平成17年8月30日～9月1日（3日間）	**調査区分**	範囲確認調査
報 告 書	刊行予定なし	**処　　置**	慎重工事

立　地

焼山遺跡は西八天岳から派生した丘陵に立地し，標高は 150 m前後を測る。丘陵北西側を路木場川が流れ，小さな谷が形成されており，遺跡は主要地方道佐世保日野松浦線より南東側の丘陵に広がっているようである。

現状では一部が畑地として利用されている他，雑種地で資材置き場になっている。周辺の茶畑等では黒曜石片の散布が広範囲に見られる。



焼山遺跡位置図［楠久］（S=1/25,000）

調　査

工事範囲の大半は急勾配の法面であり，確認調査を安全に行えるのは長さ 20 m程度の範囲にすぎないため，調査では 2 m四方の試掘坑（以下，TP と略す）を 2 箇所設定して発掘を行った。ともに 1 mほどまで掘り下げたが，淡褐色土の表土の下は礫混じりの明赤褐色粘質土層（地山）となり，遺物包含層や遺構を検出することはできなかった。

確認調査で得られた焼山遺跡の層序は次のようになる。

第Ⅰ層は淡褐色土層（表土）で，土質はパサパサで締まりがなく，ミカンや茶の根が無数に入り込むほか，拳大の礫が多数混在する。

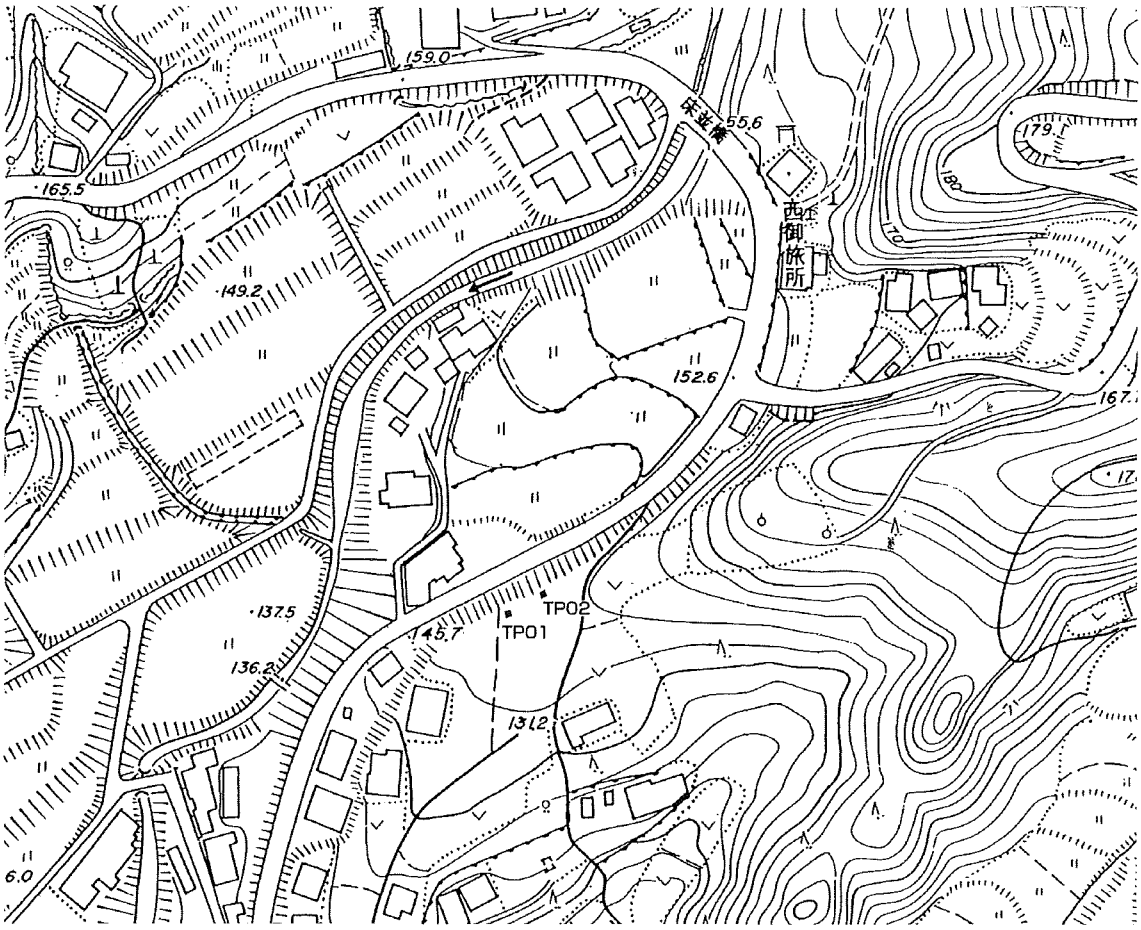
第Ⅱ層は混礫明赤（橙）褐色粘質土層で，土質は粘質気味であるが，ベタつくほどではない。礫は 50 ～ 60 ㎝大で，風化途中の玄武岩礫が大半を占める。地山を形成するものと思われる。遺物は TP01 から頁岩製石斧とサヌカイト片が，TP02　から黒曜石片が表土層から出土している。

焼山遺跡遠景

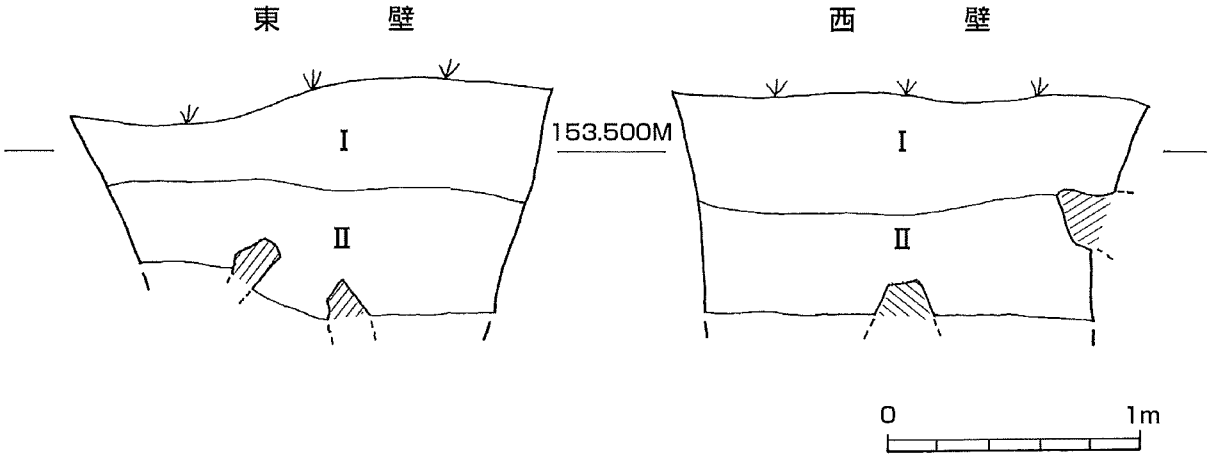
まとめ

今回の工事範囲では明確な遺物包含層や遺構は検出されず，出土遺物も混ざり込みと判断されることから，遺跡の取扱いについては慎重工事扱いとするのが妥当と考えた。ただし，工事区南東側の丘陵上には黒曜石の散布が広く見られ，今後，新たな開発行為が当該地で行われる場合は注意を要する。

［調査担当：本田］（文責：本田）



焼山遺跡調査区配置図(1/2,500)



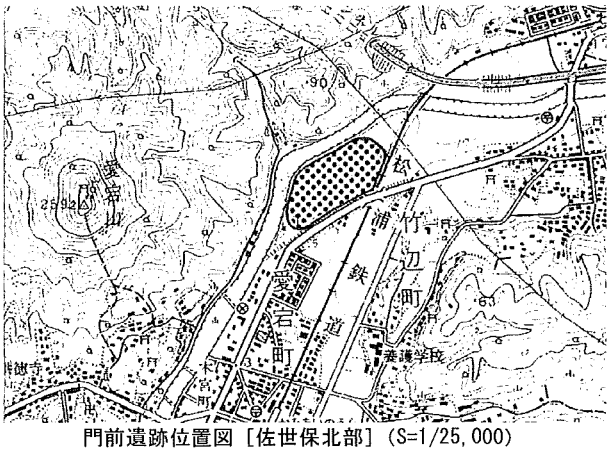
TP01土層断面図(1/30)

③ 門前遺跡（もんぜん）

所 在 地	佐世保市愛宕町・中里町	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	一般国道497号建設工事	**調査面積**	10,100㎡
調査期間	平成17年6月2日～平成18年3月29日	**調査区分**	本調査
報 告 書	平成17年度刊行，平成19年度刊行予定	**処　　置**	調査後工事

立　地

当該遺跡は，佐世保市北西部を流れる相浦川下流域の南岸部，標高約 8 mに立地している。佐賀県境にある八天岳分水嶺を水源として西に流れてきた相浦川は，ここで佐世保砂岩の露頭にぶつかり大きく南へ湾曲して河口に至る。近世以降の新田開発により河口までの距離は現在約 3.5km である。近世以前においては浅瀬の湾が展開し，当該遺跡の近くに河口があって舟により容易に海に出ることができたと考えられる。相浦川を挟んで，遺跡の西には円錐形の独立峰，標高約 259 mの愛宕山(飯盛山)が位置する。この山は遠く五島沖からも確認される。前近代の有視界航行においては，港津の成立条件としてランドマークが必要である。当該遺跡は，古くから海上交易の重要拠点であったと考えられるが，ランドマークとしての愛宕山の存在が，遺跡の成立と存続にとって最大の要因であったと推測される。また，飯盛山という古称は各地に存在するが，どの山も海上・陸上交通路沿いにあり，飯を盛った椀を神に捧げ，交通の安全を願う古代の神事に由来する名称であり，当該遺跡の性格を考える上で大変興味深い。

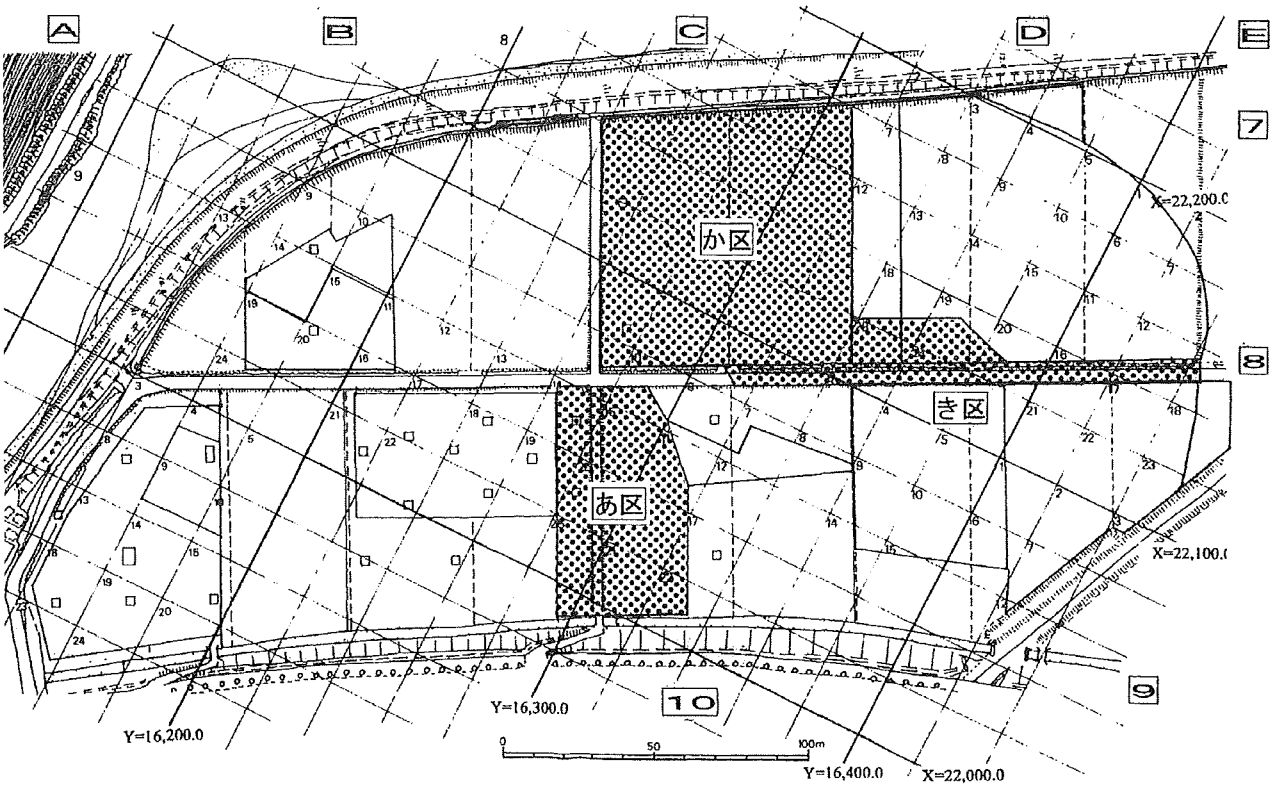


門前遺跡位置図［佐世保北部］(S=1/25,000)

調　査

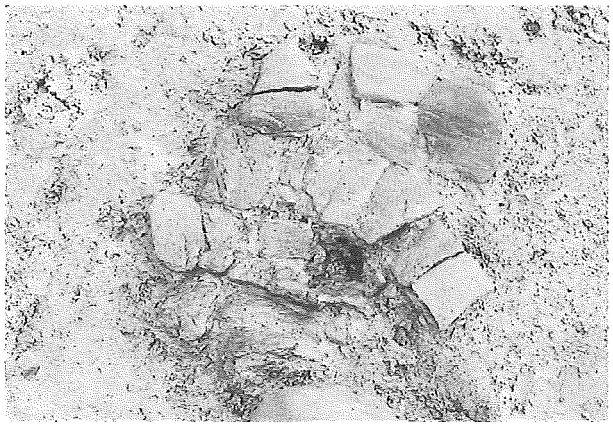
平成 17 年度の調査は，遺跡の北部中央地区と旧農道部を中心とした地域の 7,400 ㎡と，平成 16 年度からの継続調査分 2,700 ㎡を加えた，10,100 ㎡について発掘調査を実施した。調査区は，座標系に合わせて南北を主軸とする 100 m方眼の大グリッドを設定し，東西をA～E，南北を 1 ～ 10 と符号し，さらに大グリッド内を 20 m方眼で区画して中グリッドを設定，1 ～ 25 の番号を付した。また，便宜上平成 16 年度からの継続調査地区をあ区，その北側をか区，旧農道部をき区とした。調査は，基本的には 1 層の耕作土と 2 層の平成 5 年度圃場整備時の整地層を，地区によっては旧河道内堆積礫層も重機によって掘削した後に開始した。調査の結果，縄文時代早期・前期・後期・晩期，弥生時代早期・中期・後期・終末期，古墳時代初頭・前期，古代，中世，近世の遺構・遺物が検出・出土した。

あ区北半部は，縄文時代早期末～前期層が広範に展開し，各種遺構・遺物が出土した。これらの時期を細分すると，貝殻条痕系土器群(早期末)，轟式土器(前期前半)，西唐津式土器(前期中頃)，曽畑式土器(前期後半)となり，遺構・遺物は 4 時期にわたり連続して続いたことが確認できる。遺構は集石 5 基，炭化物集中区 4 基，土坑 2 基，焼土 10 基が確認された。その大半が西唐津式土器の時期と思われる。遺物は，総点数で約 40,000 点が出土しており，内訳は土器約 22,000 点，石器・石製品約 18,000 点である。遺物は，圧



平成17年度　調査区及びグリッド配置図(S=1/2,500)

倒的な数で前期のものが多く，特に土器に関しては塊での出土が目立った。塊で出土した土器の中には，接合可能なものも数多く認められた。このように接合可能な状態で出土した土器片は，当時から現代までの間に大きな土砂の流出入がないことを意味する。また，接合可能な土器はその時期が終了してすぐに土砂の堆積で潰されていることも意味する。したがって，当時の生活(作業)面であった可能性は高い。石器・石製品では石鏃を中心にスクレイパー・石匙などの出土が確認された。中には接合できるものも存在した。特に石匙に関しては未製品の出土が目立ち，その場で製作したと思われる。石器の出土状況も前述した事象の根拠の 1 つである。各時期にこのような生活(作業)面が存在したと思うが，以下，各時期における出土土器の特徴を簡単に述べる。貝殻条痕系土器群は，土器の表裏全面に貝殻条痕が認められる。主に D-9-11・16 区からの出土が確認された。轟式土器は，土器の表裏全面に貝殻条痕が認められる。数種類の土器に細分が可能であるが，特に表面に隆帯・隆線をもつ B タイプの出土が顕著であった。西唐津式土器は，土器の表裏全面に貝殻条痕を施すが，その後にナデあるいはケズリによる調整を行う。特筆すべき点は，胎土に滑石の混入が認められる。表面に文様を施すが，特にこの時期は曲線模様が多く見られる。曽畑式土器は，土器の表裏全面に貝殻条痕を施すが，その後にナデあるいはケズリによる調整を行う。この時期は基本的に直線で模様が構成される。以上が当該調査区縄文時代早期末～前期層から出土した土器の特徴であるが，遺物は西唐津式土器が最も多く出土している。この時期の土器は県内・九州内でも数遺跡しか報告されていない。また，層位的な順位での出土も他に例を見ず，門前遺跡から出土した西唐津式土器は大変貴重な資料であり，この時期の実態解明をする上で全国的にも価値が高い遺跡と思われる。あ区南半部では，縄文時代晩期～弥生時代後期の河道を検出した。長さ約 60 m，最深部 1.7 mを確認した。南岸の大半は調査区外，または後世の河道により失われているため，確認できない。河道内東部からは木組遺構 44 基が検出した。形態は長方形のものが多いが，円形や大木を半裁して刳り抜いたものもあった。構築方法は，小口を穿孔して側板を組み合わせたもの，木組の内側あるいは外側に杭を打ち込み固定したも

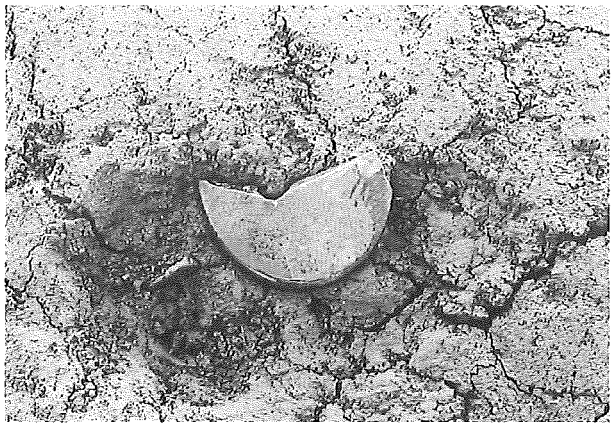


あ区轟式土器出土状況

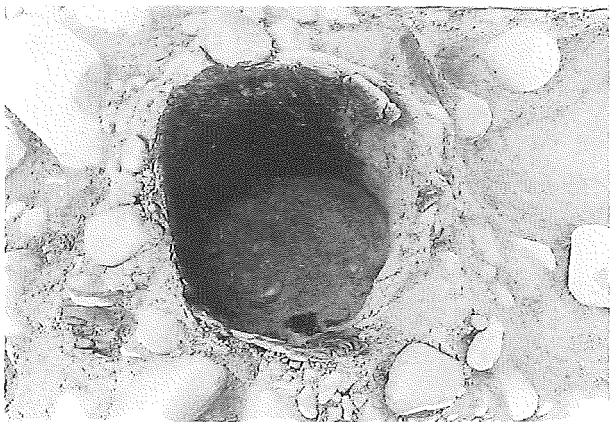
あ区西唐津式土器出土状況

のなどが確認された。年代測定の結果，縄文晩期，弥生時代早期～前期，弥生時代中期，弥生時代後期の4期にわたることが判明している。この木組遺構の性格については不明である。また，河道内西部からは矢板列遺構が検出した。遺構の南にあった弥生時代早期河道の侵食から北にあった台地部を守る護岸施設と考えられる。年代測定でも弥生時代早期の結果がでている。河道内検出遺構では他に杭列なども確認された。河道内出土遺物としては，弥生時代早期・中期・後期の土器，打製・磨製石斧，砥石，石包丁などの石器，平鍬，鋤，横槌，杵，槽などの木製品，銅釧，袋状鉄斧などの金属製品を確認した。

か区は，平成16年度のお区同様，中世以降の河道や客土などにより堆積が分断されているため，遺構，遺物共に散漫な検出，出土状況であった。遺構については，C-8-13～15・18・19区でピット群を検出した。ピット群は，弥生時代終末期～古墳時代初頭の層位で検出したが，はっきりとしたプランなどは判明しなかった。旧河道は6条検出し，出土遺物から縄文時代晩期～中世にかけての河道と考えられるが，新しい河道や礫に分断され一部分のみの確認に止まる。以下，検出河道の内容をまとめた。SR-1は，D-8-11・16・21，C-8-20・25区に位置する古代末～中世前半期の河川。長さ48 m，最大幅17 m，最深部2.3 mを測る。巨大な楠及び，土師器・瓦器・石鍋などが出土。位置や遺物の出土状況から平成16年度お区のＳＲ-1の続きである。SR-11は，C-8-18・19区に位置する古代末の河道。長さ20 m，最大幅8.8 m，最深部1.2 mを測る。流木及び，土師器などが出土。SR-12は，D-8-12・16・17・21・22区に位置する。D-8-17区西壁土層から3条の立ち上がりが検出され，新しい立ち上がりから順にａ→ｂ→ｃとした。ａは中世中期，ｂは古代末～中世前半期，ｃは古代末の河道と考えられる。全体で長さ32 m，最大幅20 m，最深部1.7 mを測る。瓦器・陶磁器・石鍋などが出土。SR-14は，C-8-18・19区に位置し，SR-11の下に流れる縄文時代



あ区玦状耳飾出土状況



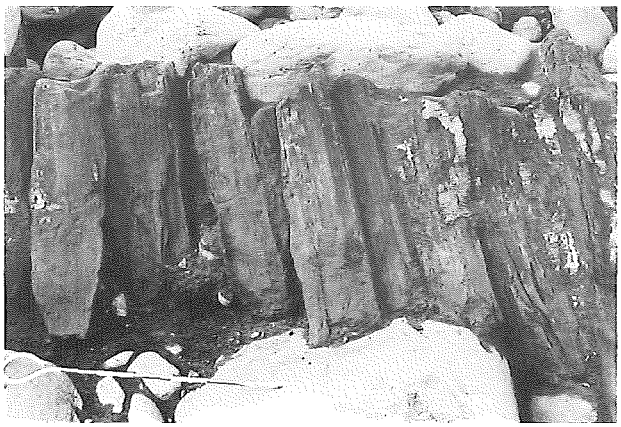
あ区11号木組検出状況

あ区12号木組検出状況

あ区矢板列検出状況（東から）

晩期～古墳時代初頭の河道。長さ20.8m，最大幅10.8m，最深部1.5mを測る。弥生土器片が出土。SR-15は，C-8-10・13～15・18～20，D-8-6・11区に位置する縄文時代晩期の河道。長さ68m，最大幅17.2m，最深部2.3mを測る。縄文時代晩期の土器片が数点出土。SR-20は，C-8-15・20区に位置する弥生時代終末期～古墳時代初頭の河道。長さ14m，最大幅3.2m，最深部1.1mを測る。弥生土器・古式土師器が出土した。

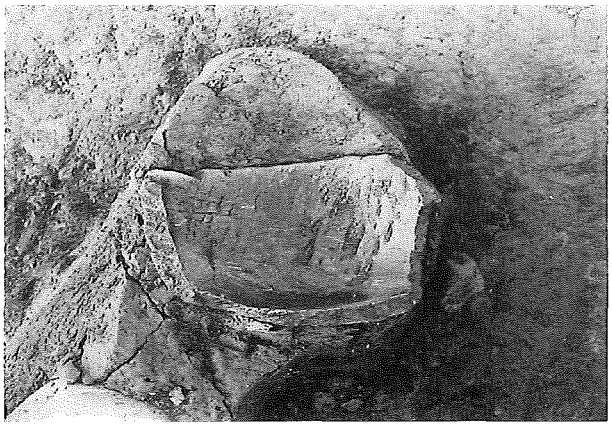
き区では，主要な遺構として，平成16年度と同様に第3層において近世流路3条・竪穴式住居跡1棟・掘立柱建物跡2棟・柱穴群を，第5層において縄文時代前期包含層・河道2条，第6層では黒曜石集石遺構・河道1条を検出した。竪穴式住居はE-8-16区において検出した。規模は南北長約4.1m，東西長約4.1mの正方形を呈する。遺構は削平が著しいが，炉跡・柱穴・屋内土坑・壁溝の各施設と一部貼床を検出した。炉跡は住居跡の中心部分に設けられ，両側には2本の柱穴を確認した。壁溝は浅く，隅丸方形に巡る。遺物の出土は土器片が確認されたのみである。時期は遺物の出土が少ないことから詳細は不明だが，平成16年度に検出した竪穴式住居跡(SH-02旧)の規模と構造を比較して，類似していることから同じく弥生時代終末期頃と考える。掘立柱建物跡はE-8-12区，D-8-20区において2棟検出された。E-8-12区で検出されたSB-01は，3間×4間と長方形を呈し，南東側のみが5間である。北西側の柱間は70～90cmと狭く，南東側の柱間は隅柱付近が約15cm，中心部分は80～120cmである。また南東側の柱穴は，隅柱を結んだラインより外側へ約10cm飛び出す。主軸はN-42°-Eである。時期はSB-01Pｉt1の柱痕から出土した土器から，弥生時代終末期と考えられる。D-8-20区で検出されたSB-02は，4間×4間のやや桁間が長い長方形を呈し，南東側の平成16年度調査区う区で検出されたピットとつながることを確認した。SB-02はSB-01と同様に，南東側の柱穴が，隅柱



あ区矢板列（部分）検出状況（南から）

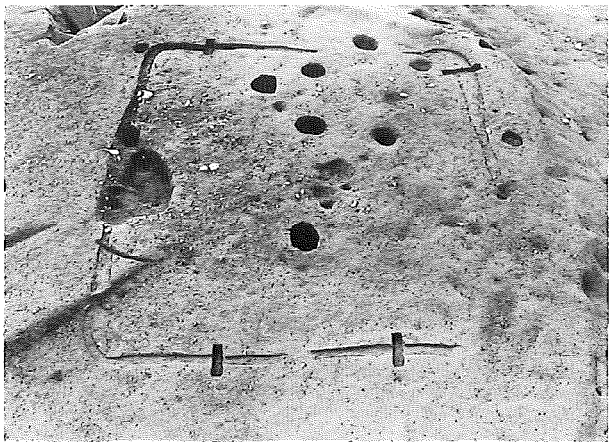
あ区杭列検出状況（北東から）

か区SR1内石鍋出土状況

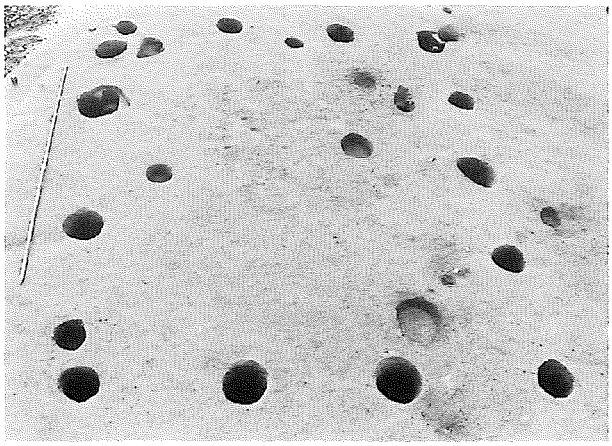


か区SR1内土師皿出土状況

を結んだラインより外側へ約10cm飛び出す。柱穴は約40～50cmと大きく，柱間は桁間が70～80cmと広く，梁間が40～60cmと狭い。主軸はN-35°-Eである。時期は出土遺物が土器片のみのため不明であるが，SB-01と同様に南東側が飛び出す形態から同時期と考えられる。柱穴群は調査区東側において多数確認したが，現在のところ掘立柱建物として結べていない。時期は出土した遺物から，竪穴式住居跡等と同時期あるいは弥生時代後期後半頃と考えられる。第5層で確認された縄文時代前期包含層は平成16年度調査区お区南側において確認された包含層の続きである。この包含層は，北東から南西に走るSR-16によって切られている。SR-16は遺物が確認できなかったが，平成16年度検出した縄文時代晩期の河道(SR-8)によって切られていることから，縄文時代前期以降～晩期以前の河道と考えられる。縄文時代前期包含層の広がりは，き区調査区のE-8-11・12区に集中し，調査区西側では確認できなかった。包含層からは曽畑式土器を中心に，轟式土器を数点確認した。石器は土器の出土点数と比べると少ない。この包含層の下層にはSR-16と同じく北東から南西にかけて走るSR-17を確認したが，これはあ区の縄文時代早期末包含層の下層につながると考えられ，時期は縄文時代早期末以前の河道と考えられる。第6層のD-8-20区において確認した黒曜石集石遺構は，明確に掘り込まれたプランを確認できなかったが，径4～7cmの東浜産系黒曜石が5点集中して出土した。この層からは轟式土器が出土するが，SR-16によって縄文時代前期の堆積が切られていること，明確なプランを検出できなかったこと，地山の礫層付近で出土したことの3点から二次堆積の可能性も考えられ，今後の遺物整理による検討が必要である。



き区竪穴式住居跡検出状況（北から）



き区掘立柱建物跡(SB-01)検出状況（北東から）

まとめ

平成 17 年度の門前遺跡の調査成果において特筆すべきは，まずあ区北半部の縄文時代早期末～前期層から出土した土器群である。この時期の土器は県内・九州内でも数遺跡しか報告されていない大変貴重な資料であり，さらに層位的な順位での出土は他に類例を見ず，この点のみにおいても縄文時代早期末～前期の実態を解明するうえで，当該遺跡は全国的にも価値が高い遺跡と評価される。今後はこれまでの調査結果を総合的に分析し，当該遺跡全体における縄文時代早期末～前期の様相解明が必要である。また，佐世保市相浦川流域は泉福寺洞窟，岩下洞穴，菰田洞穴，下本山岩陰など，旧石器時代終末から縄文時代前期にかけての多くの洞穴遺跡が知られている。当該遺跡はこの地域の貴重なオープンサイトの遺跡である。これらの洞穴遺跡，なかでも 0.5km しか離れていない下本山岩陰遺跡との比較を通して，共通する縄文時代前期の状況を地域的に検討することも必要である。相浦川流域における洞穴遺跡は縄文時代前期で終焉を迎えるが，この時期の拠点遺跡とされる下本山岩陰遺跡と当該遺跡との検出遺構や出土遺物などの対比から，その後拠点遺跡が洞穴遺跡からオープンサイトに移行すると考えられるこの地域の，縄文社会の展開を考察する上で重要な指針を得られると考える。次に，これもまた他に例がない，あ区南半部の縄文時代晩期～弥生時代後期の河川内から検出した木組遺構群である。縄文晩期，弥生時代早期～前期，弥生時代中期，弥生時代後期の長期にわたり，ほとんど変わらない方法で同じ場所に構築された意義，性格など謎の多い遺構であるが，構造的に酷似している平成 15 年度検出した弥生時代早期の木棺墓群の再検討も含め，他遺跡の類例検出を待ちながらさらに詳細な検証が必要である。また，か区・き区で検出した弥生後期～古墳初頭の，柱穴群，掘立柱建物，竪穴式住居などの集落，または集落に関連する遺構群も注目される。平成 16 年度のう区・え区で確認されたこの時期の集落のさらなる広がりが判明した。遺構群の様相から集落の中心は調査対象地区外の，当該遺跡から東南方向の低丘陵付近と想定されるため，平成 14 年度に確認された墓域などを含めると，かなりの規模と範囲をもつ弥生集落であったことが推測される。現在，長崎県本土部におけるこの時期の集落遺跡は数例のみであり，今後別調査による遺跡周辺地区の解明が望まれる。

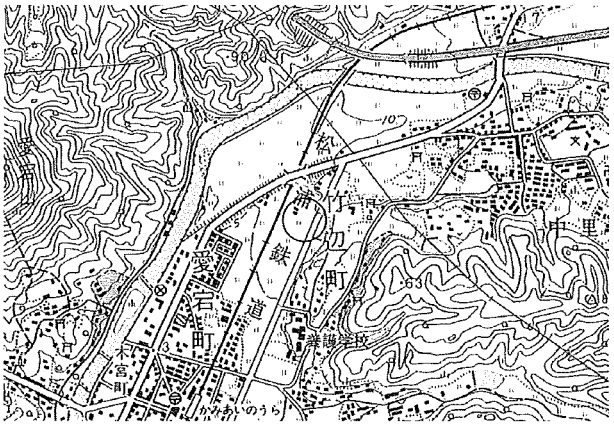
【調査担当：副島・町田・杉原・吉野・中村・石橋・江上・松原・萩坂・沖】（文責：杉原）

④ 竹辺（たけべ）C遺跡

所 在 地	佐世保市竹辺町	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	国道497号建設工事	**調査面積**	1,974㎡
調査期間	平成17年10月3日～平成18年3月29日	**調査区分**	本調査
報 告 書	平成19年度刊行予定	**処　　置**	調査後工事

立　地

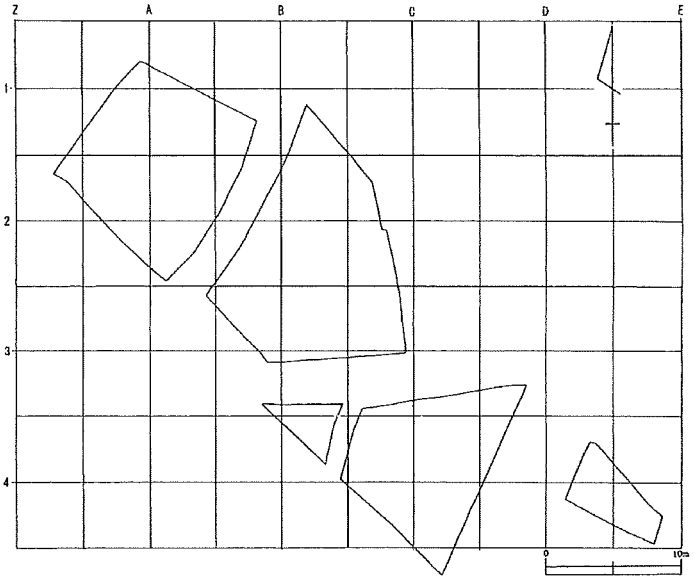
遺跡は，佐世保市北部を東から西へ流れる相浦川が形成した河岸段丘上に位置し，北東から南西に向けて緩やかに傾斜している。調査前までは，水田および宅地として利用されていた。17 年度の調査区の標高は約 11 mを測る。遺跡に隣接する地域には竹辺 D 遺跡や門前遺跡がある。



竹辺C遺跡位置図［佐世保北部］(S=1/25,000)

調　査

17 年度の調査は，進捗状況に応じて 5 箇所の調査区を設定して行った。耕作土を重機により掘削した後，国土座標に基づいた 10 m方眼を設定し，人力により掘削を進めた。調査において，遺構・遺物を検出・出土した調査区は，5 地区中 2 地区であった。調査の結果検出された遺構は，ピット 1,093 基・土坑 10 基・掘立柱建物跡 17 棟・壺棺墓 1 基・箱式石棺墓 1 基・墓壙 3 基・溝 4 条・性格不明の遺構 18 基である。遺構・遺物を検出・出土した 2 地区のうち，古代末～中・近世の遺構・遺物を多く検出・出土したのは，A-1・A-2 区を中心とする調査区である。特に，中・近世のものと思われるピットやそれからなる掘立柱建物跡，土坑が目立っているが，この調査区で検出した墓壙の 1 基からガラス玉が 1 点出土している。一方，B-1・B-2・B-3・C-2・C-3 区を中心とする調査区では，弥生時代から中・近世にかけての遺構・遺物を多く検出・出土した。壺棺墓は C-3-1 で検出し，弥生時代中期末から後期初頭頃と思われる壺がおさめられていた。箱式石棺墓は B-2-2・C-2-2 にまたがって検出したが，上部が後世の攪乱を受けており，石棺の残りは良好ではなかった。



調査区図(S=1/1,000)

墓壙は 2 基を確認し，1 基からガラス玉が 1 点出土している。方形周溝墓は 3

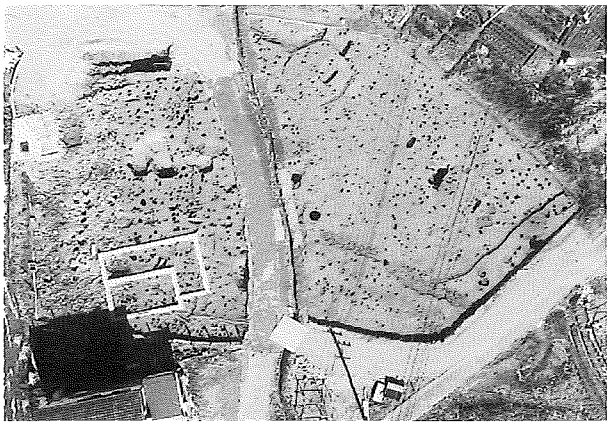
基を確認したが，そのうち1号と2号は周溝が接しており覆土観察からの新旧関係は確認できず，溝を共有して同時期に併存していたと考えられる。出土遺物から推察される時期は4世紀頃である。

まとめ

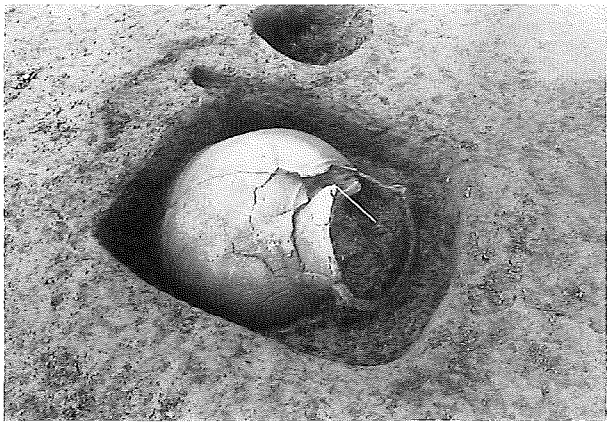
平成17年度の竹辺C遺跡の発掘調査において特筆すべきは，方形周溝墓の存在を確認したことである。さらに，壺棺墓や石棺墓，墓壙が確認されたことは，本遺跡が，弥生時代後期から古墳時代中期頃にかけての墓域であり，近隣に同時期の居住域の存在が推察される。また，多数の柱穴群を検出し，古代末～中・近世の場の利用を確認した。

【調査担当：副島・町田・木村・川向・大山】（文責：木村）

遺構配置図(S=1/500)



遺構検出状況



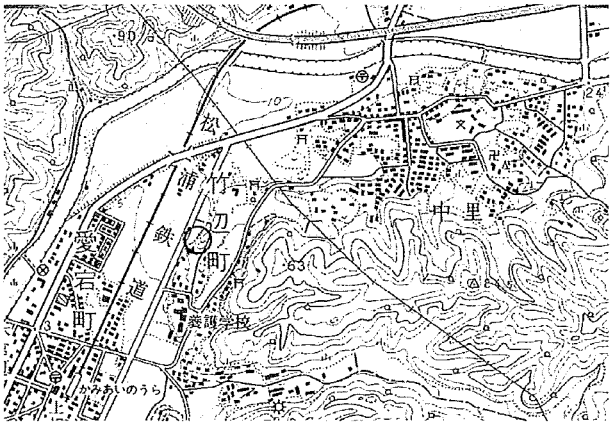
甕棺（北から）

⑤ 竹辺（たけべ）D遺跡

所 在 地	佐世保市竹辺町	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	国道497号建設工事	**調査面積**	506 ㎡
調査期間	平成17年10月3日～平成18年3月29日	**調査区分**	本調査
報 告 書	平成19年度刊行予定	**処　　置**	調査後工事

立　地

本遺跡は，佐世保市北部を東から西へ流れる相浦川が形成した河岸段丘上に位置し，川の左岸にあたる。地形の特徴から大きく 2 地点に分けることができる。遺跡の東側部分は標高約 16.5 mで緩やかな谷になっており，水田として利用されている。遺跡の西側部分は標高約 17 mで，小丘陵となっており，住宅地や畑地として利用されている。この丘陵の下方には，竹辺 C 遺跡が広がる。本遺跡の北 100 mには，平安時代の末，この地を開拓した武辺氏が創建したとされる大宮姫神社がある。また，遺跡周辺には，松浦氏の墓所をはじめ，中世の石造物が数多くみられ，竹辺 A・B・C 遺跡・殿平遺跡・新田遺跡等の中世の遺物散布地が確認されている。遺跡の東側に隣接する丘陵は，宗家松浦 13 代盛によって築かれたとされる武辺城跡である。当遺跡一帯は，古代末から中世にかけての遺跡集中地区である。

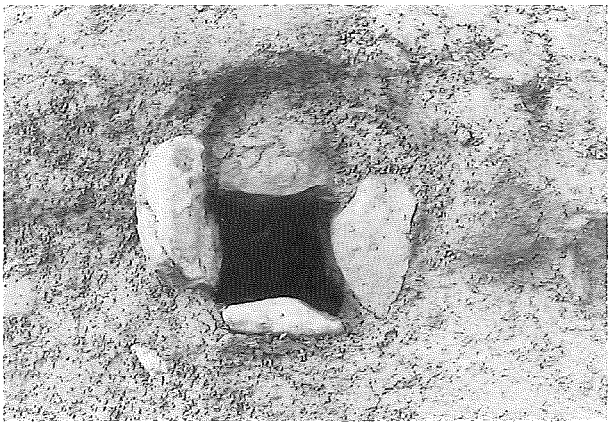


竹辺D遺跡位置図［佐世保北部］(S=1/25,000)

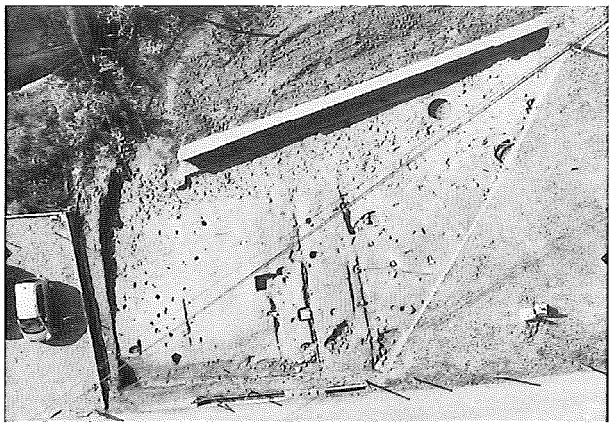
調　査

耕作土を重機により掘削した後，国土座標に基づいた 20 m方眼にグリッドを設定，さらに，10 m方眼の中グリッドを設定し，人力により掘削を行った。なお，遺構番号は前年度の調査において付した番号から継続して使用した。その結果，検出された遺構は，ピット 53 基，土坑 2 基，掘立柱建物 1 棟，溝 1 条である。調査区北端部，F-6 グリッドにおいて検出した掘立柱建物は，建物を構成する柱穴内に，拳大の礫が充填されていた。出土遺物は皆無で，遺構の時期は特定できないが，前年度の調査成果を踏まえると，中・近世以降のものと考えられる。その他の遺構からの遺物の出土も少ない。また，前年度の調査同様，旧石器時代の遺物包含層を確認し，尖頭器 1 点とナイフ形石器 1 点を含む石器 37 点が出土した。

調査風景


柱穴検出状況(F-6-4区)

遺構検出状況（東から）

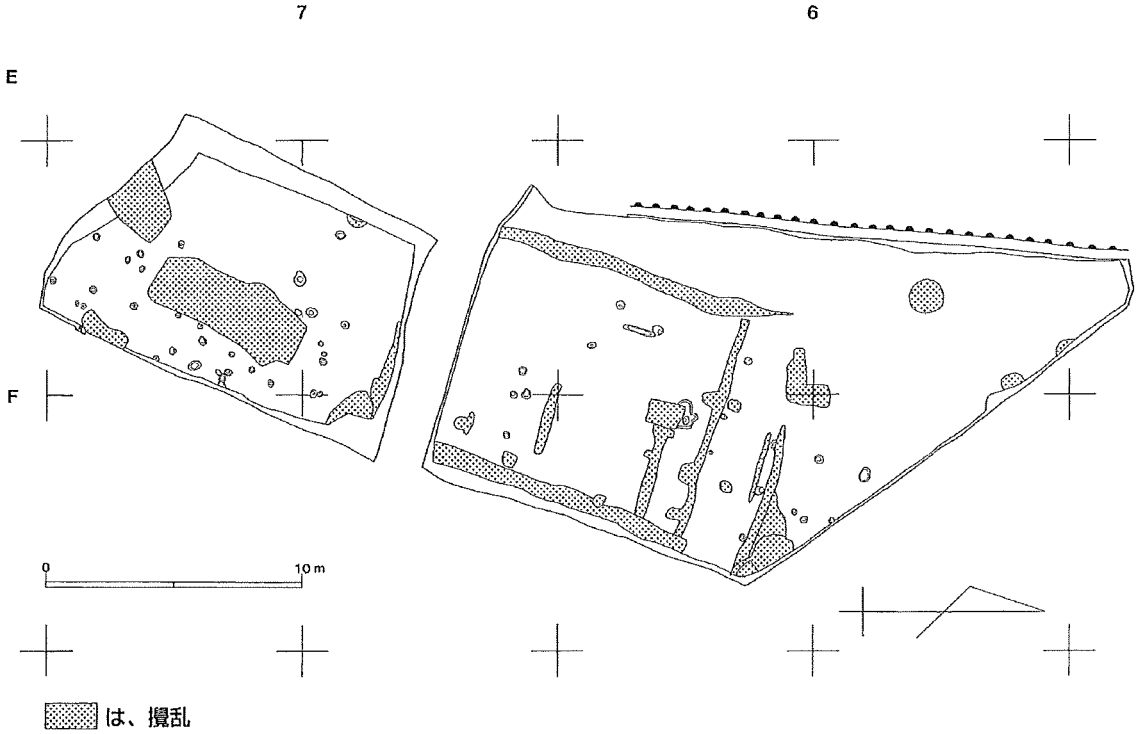


遺構検出状況（上空から）

まとめ

今年度の竹辺 D 遺跡発掘調査区は，段丘崖の落ち際にあたることから，古くから土地利用があまりなされておらず，結果として遺構，遺物の検出が少なかったものと思われる。なお，今年度の調査地区は，記録保存を行ったので，工事に支障はないと思われる。当該遺跡については，次年度も継続調査を実施する予定である。

【調査担当：副島・町田・木村・川向・大山】（文責：川向）



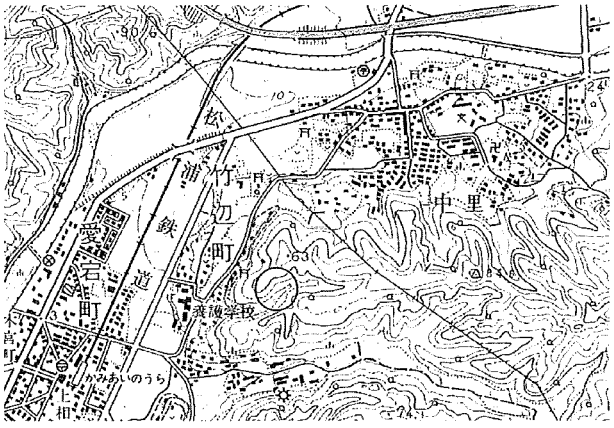
遺構配置図(S=1/300)

⑥ 武辺城跡（たけべじょう）

所 在 地	佐世保市竹辺町	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	国道497号建設工事	**調査面積**	19,700㎡
調査期間	平成17年6月15日～平成18年3月17日	**調査区分**	本調査
報 告 書	平成19年度刊行予定	**処　　置**	調査後工事

立　地

遺跡は佐世保市の北西部に位置し，東側背後には標高 300m ～ 400m の山々が連なり，それらの山系の先端部にあたる標高約 60m の丘陵地に立地している。本遺跡は相浦川が形成した沖積地に隣接していて，河口までも 3 km程と海岸にとても近い。相浦川を挟み西には標高 259 mの愛宕山が聳え，この地の目印的存在であり，信仰の対象となっている。この地域は佐世保層群と呼ばれる砂岩層が多く見られ，遺跡がある丘陵部も砂岩からなっている。また，遺跡周辺には江戸時代以降の炭鉱が多く，遺跡内にもボタ山が存在する。



武辺城跡位置図［佐世保北部］（S=1/25,000）

調　査

調査は，調査区を座標系に合わせて南北を主軸とする 20 m方眼のグリッドを設定し，南北に 1 ～ 18，東西にＡ～Ｎの番号を付した。また，便宜上各地区に西側より「登り口」「西斜面 1」「西平場 1」「西平場 2」･･･と名称を付けた。調査は，最上層の腐葉土から人力により掘削を行ったが，一部重機でも表土掘削を行った。その結果，登り口と調査区中央部の谷斜面 2・3，谷部に遺構・遺物が確認できた。

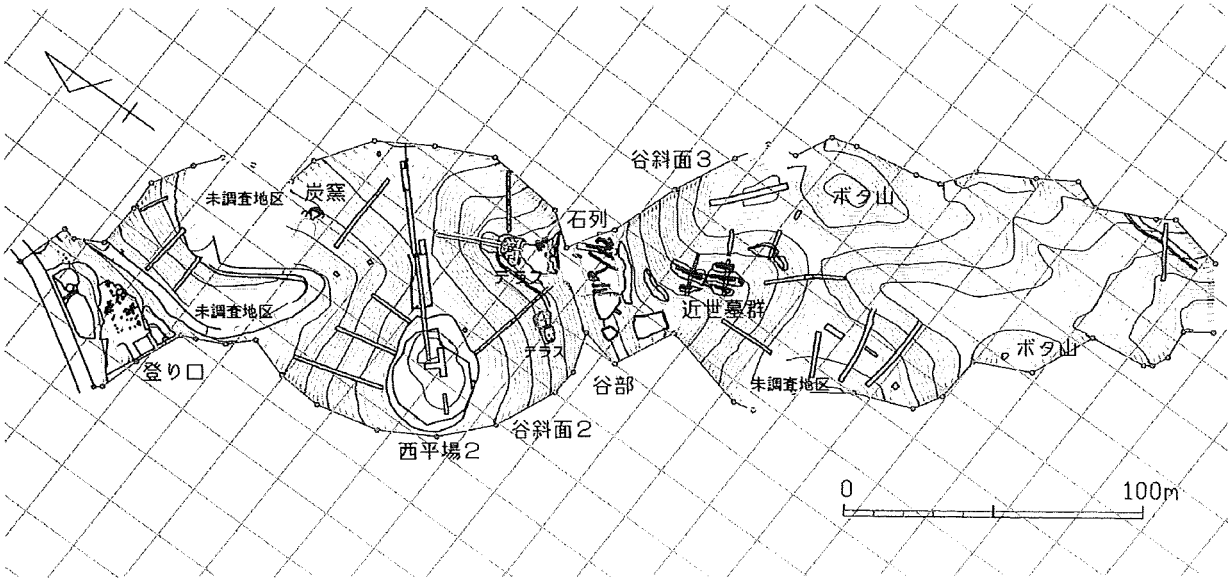
登り口では，最下段から弥生終末頃の自然流路 1 条と中世の自然流路 1 条，並びに溜め井 1 基を確認し，中段部からは近世以降の土壙 6 基，柱穴 62 基，1 × 2 間の掘立柱建物 1 棟を検出した。遺物は，弥生終末流路から弥生土器や土師器，中世流路で 12 ～ 14 世紀頃の白磁碗や皿，同安窯系青磁皿が出土した。谷斜面 2 では，谷部を見下ろす場所に段違いのテラスが検出された。ここではいずれのテラスからも柱穴を確認している。また，谷斜面 1 との間の小谷からは，整地された 3 段のテラスが検出された。中段テラスは切り土・盛り土で整地し平場を造成している。遺構は，土壙や柱穴，溝を検出した。遺物は，土壙から 15 世紀後半の白磁皿が出土した。下段テラスでは，石列を 2 列検出した。また，近世の集石遺構 3 基を確認し，うち 2 基から絵唐津の皿や簪が出土した。谷部からは，5 条の石列と溜め井と思われる石組みを検出した。遺物は，石鍋片と土師皿片が出土したが，当該時期の構築かは不明である。今後，他地域での同様な検出例との比較検討が必要である。谷斜面 3 は，近世墓域となっており 29 基の墓壙を検出した。うち 2 基は改葬されていないため甕が出土した。他の墓壙は改葬のため掘り返されており出土遺物と記銘年号とを対応させることができなかった。

まとめ

城が機能していた時期に関連するはっきりとした遺構・遺物の確認ができなかった。谷斜面や谷部の検出遺構等については，城全体からこの地区の果たした役割を，周辺地域と関わりを含め究明する必要があると思われる。

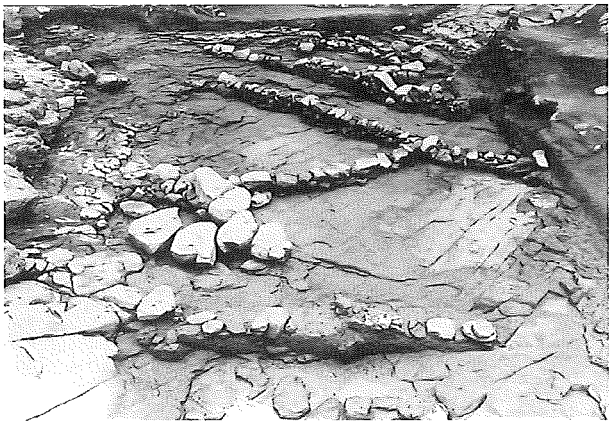
武辺城跡発掘調査地区は，記録保存を行ったので工事に支障はないと思われる。なお，当該遺跡については，次年度も継続調査を実施する予定である。

【調査担当：副島・町田・川畑・今里・川鍋・深澤・栗山・冨永・柴田】（文責：今里）



調査区及び関連遺構位置図(S=1/2,500)

テラス検出状況



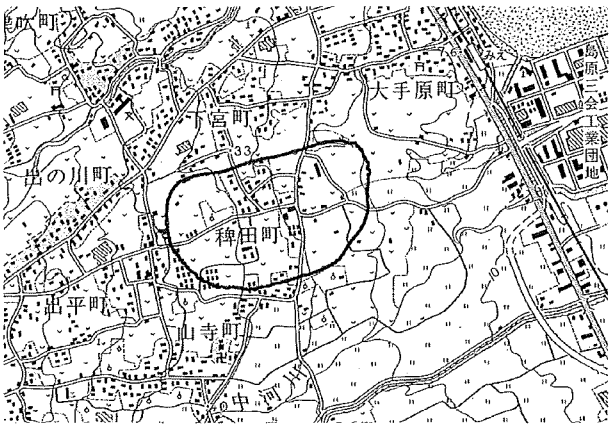
石列検出状況

⑦ 稗田原遺跡（ひえだばる）

所 在 地	島原市稗田町	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	一般県道野田島原線道路改良工事	**調査面積**	34㎡
調査期間	平成17年5月9日～平成17年5月17日	**調査区分**	範囲確認調査
報 告 書	平成18年度刊行予定	**処　　置**	本調査

立　地

遺跡の所在する稗田町は，島原半島東部に位置している。遺跡は雲仙岳から派生した火山性扇状台地（三会原）上に展開しており，標高は約 27 m前後である。三会原の南西には雲仙岳山系である眉山や普賢岳が迫り，東には有明海をはさみ，熊本県の西岸部を望むことができる。このような地勢から，火山活動によってもたらされた降灰層が良好な状態で残っており，鬼界アカホヤ火山灰や六ッ木火砕流などが確認されている。これらは，考古学的要素だけではなく，火山活動による自然災害の痕跡としての要素を持ち合わせており，多くの分野での研究対象とされている。火山灰層の中には，農業に適した肥沃な土も含まれており，周辺一帯は県内でも有数の農業地帯になっている。現在は，畑地や水田として広く利用されており，人参やレタス，ショウガや稲などが盛んに栽培されている。



稗田原遺跡位置図［島原］（S=1/25,000）

調　査

島原振興局により一般県道野田島原線の道路改良工事が計画された。工事予定箇所は現稗田町バス停より北側である。これを受け，今回範囲確認調査を行った。試掘坑（以下 TP と略す）は現道をはさみ西側に 2 × 2 mを 3 箇所，東側に 2 × 2 mを 5 箇所，1 × 2 mを 1 箇所の計 9 箇所（34 ㎡）設定した。比高差は東側が約 2 m程低くなっている。TP の番号は西側においては，南から北に向かい A ～ C とし，東側は北から南にむけて D ～ I と割り振りした。土層堆積は以下の通りである。

Ⅰ　層：黄色灰色土層（耕作土）
Ⅱ　層：黄色灰色土層（水田床土）
Ⅲa 層：黒褐色土（しまりのある火山灰堆積層）
Ⅲb 層：黒褐色土（赤みの強い火山灰堆積層）
Ⅳa 層：黒褐色土（しまりのない火山灰堆積層）
Ⅳb 層：黒褐色土（ややしまりのある火山灰堆積層）
Ⅴa 層：黒褐色土（ややしまりのある火山灰堆積層で直径 5 ～ 10 ㎜の白色礫を多く含む）
Ⅴb 層：黒褐色土（しまりのある火山灰堆積層で白色礫を含まず粘性が高い）

作業風景（南から）

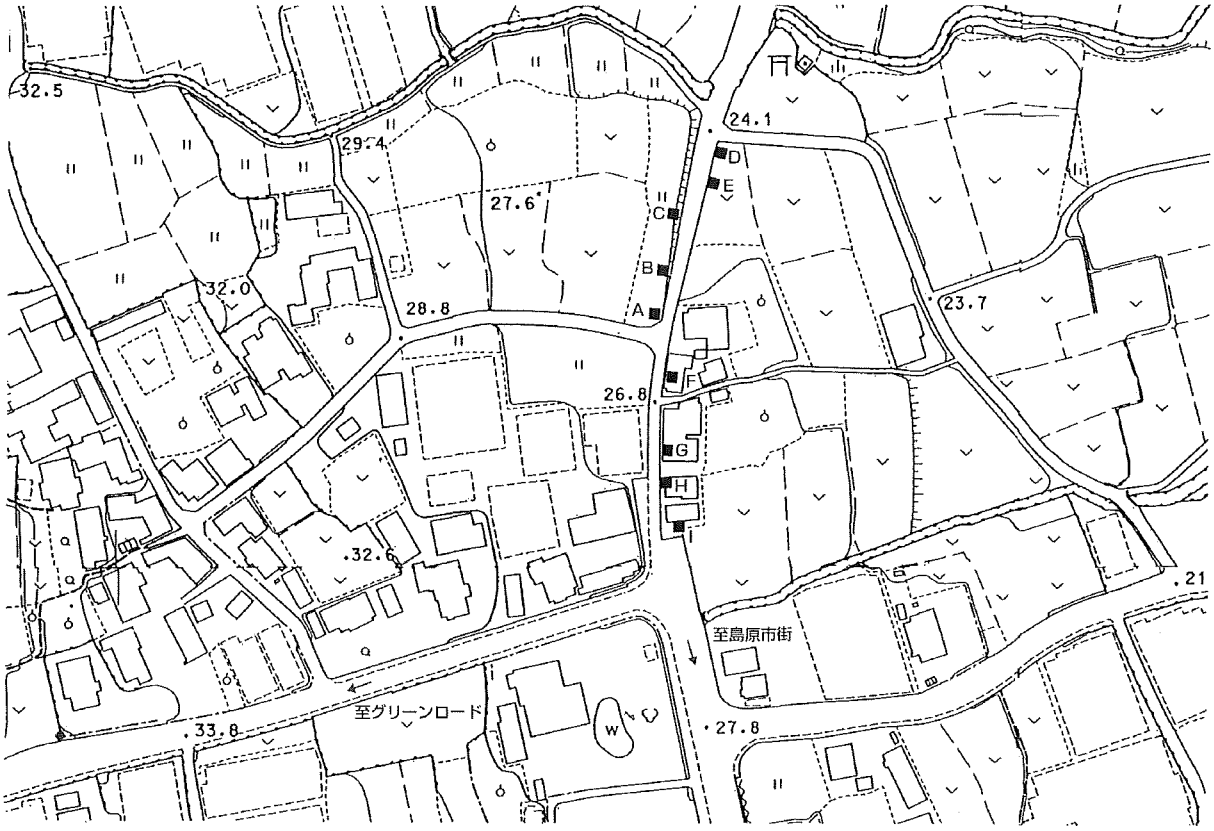
Ⅵ　層：黒褐色土（しまりのある火山灰堆積層で混入物が少ない）
Ⅶ　層：暗オリーブ褐色砂礫（しまりのない砂礫層で直径 5 ㎝以上の礫を含む）
Ⅷ　層：黄褐色土（混入物の少ない粘質土）
Ⅸ　層：黒褐色土（微少な風化礫を多量に含む。しまりが強い土）

西側に設定した TPA ～ C においては若干の違いは見られるものの，Ⅰ～Ⅶ層までは共通して堆積している。また，C 区においてのみⅦ層の掘り下げを行い，Ⅷ層の堆積を確認した。東側においては TPF でのみ西側と相違のない堆積がみられた。残りの TPD・E，G ～ I においてはⅦ層まで大きく削平を受けていた。

まとめ

今回の範囲確認調査において，良好な遺物包含層を検出したのは西側(TPA ～ C)である。Ⅳ～Ⅵ層では，龍泉窯系青磁碗や滑石製石鍋などが多数出土している。これらの層は，中世の遺物包含層と考えられる。また，遺構も TPB において，Ⅳb 層を掘り込むかたちの土坑を 1 基検出している。このことから西側一帯にかけては，中世の遺構が残存している可能性が非常に高い。一方，東側においても本来は，遺物包含層が広がっていた可能性があるが，道路建設や宅地造成の際に大きく削平されてしまっているようである。

【調査担当：中尾・平田】（文責：平田）



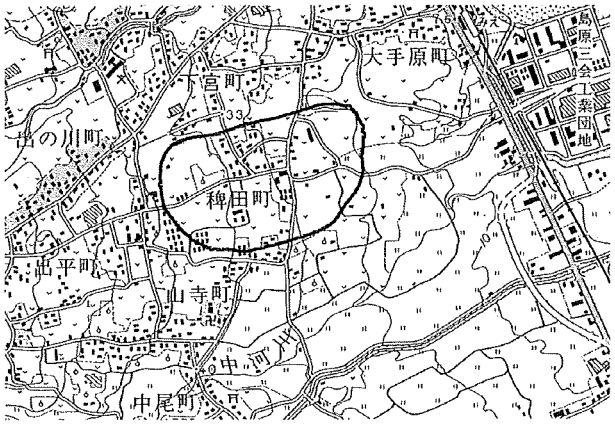
調査区位置図(1/2,500)

⑧ 稗田原遺跡（ひえだばる）

所 在 地	島原市稗田町	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	一般県道野田島原線道路改良工事	**調査面積**	14㎡
調査期間	平成18年2月20日～平成18年3月3日	**調査区分**	範囲確認調査
報 告 書	刊行予定なし	**処　　置**	調査後工事

立　地

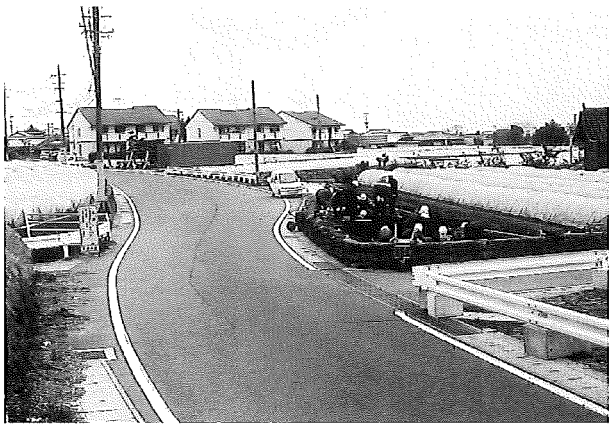
遺跡の所在する稗田町は，島原半島東部に位置している。遺跡は雲仙岳から派生した火山性扇状台地（三会原）上に展開しており，標高は約 27 m前後である。三会原の南西には雲仙岳山系である眉山や普賢岳が迫り，東には有明海をはさみ，熊本県の西岸部を望むことができる。このような地勢から，火山活動によってもたらされた降灰層が良好な状態で残っており，鬼界アカホヤ火山灰や六ッ木火砕流などが確認されている。これらは，考古学的要素だけではなく，火山活動による自然災害の痕跡としての要素を持ち合わせており，多くの分野での研究対象とされている。火山灰層の中には，農業に適した肥沃な土も含まれており，周辺一帯は県内でも有数の農業地帯になっている。現在は，畑地や水田として広く利用されており，人参やレタス，ショウガや稲などが盛んに栽培されている。



稗田原遺跡位置図［島原］（S=1/25,000）

調　査

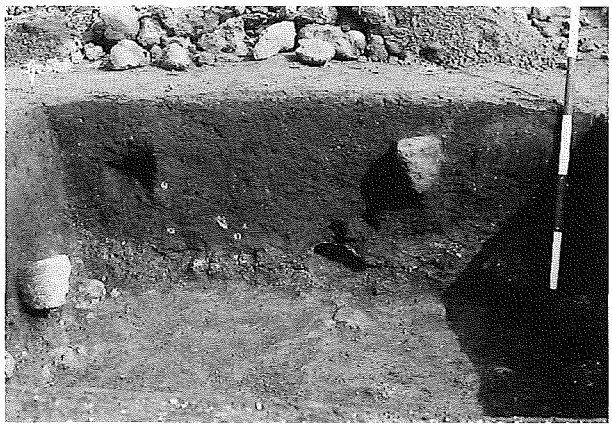
島原振興局により一般県道野田島原線の道路改良工事が計画された。工事予定箇所は現稗田町バス停より北側である。これを受け，範囲確認調査を実施した。確認調査箇所は遺跡範囲の北端と，その隣接地であり，現在は畑地とし利用されている。試掘坑（以下 TP と略す）は，現道の東側に 2 × 2m を 2 箇所と，2 × 3m を 1 つの計 3 箇所（14 ㎡）設定した。TP 番号は北から南に TP1 ～ TP3 と割り振りした。


調査区近景（南から）

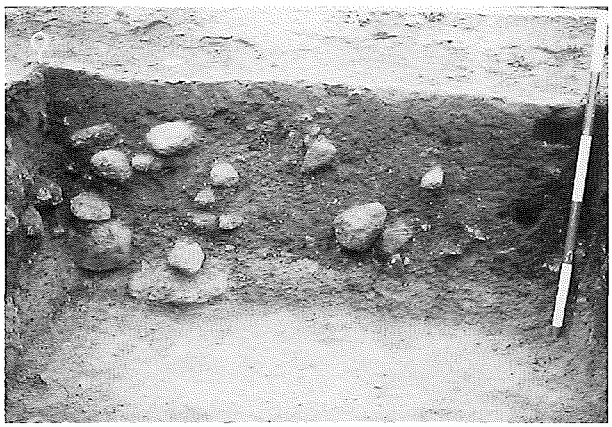
土層堆積は以下の通りである。

Ⅰ　層：耕 作 土
Ⅱａ層：暗褐色土（拳大の礫を含む）
Ⅱｂ層：褐 色 土（Ⅱa層より黄色味が強い）
Ⅲ　層：黒褐色土（白色パミス含む，人頭大の礫を多く含む）
Ⅳ　層：オリーブ黄色礫（堅くしまった礫層で，こぶし大～人頭大の礫を多く含む）

TP3 のみⅡｂ層の堆積が見られなかった。また，Ⅳ層は，平成 17 年 5 月 9 日～平成 17 年 5 月 17 日に行った稗田原遺跡範囲確認調査で検出したⅦ層暗オリーブ褐色砂礫(しまりのない砂礫層で直径 5 cm以上の礫を含む)と，同一と考えられる。



ＴＰ２東壁

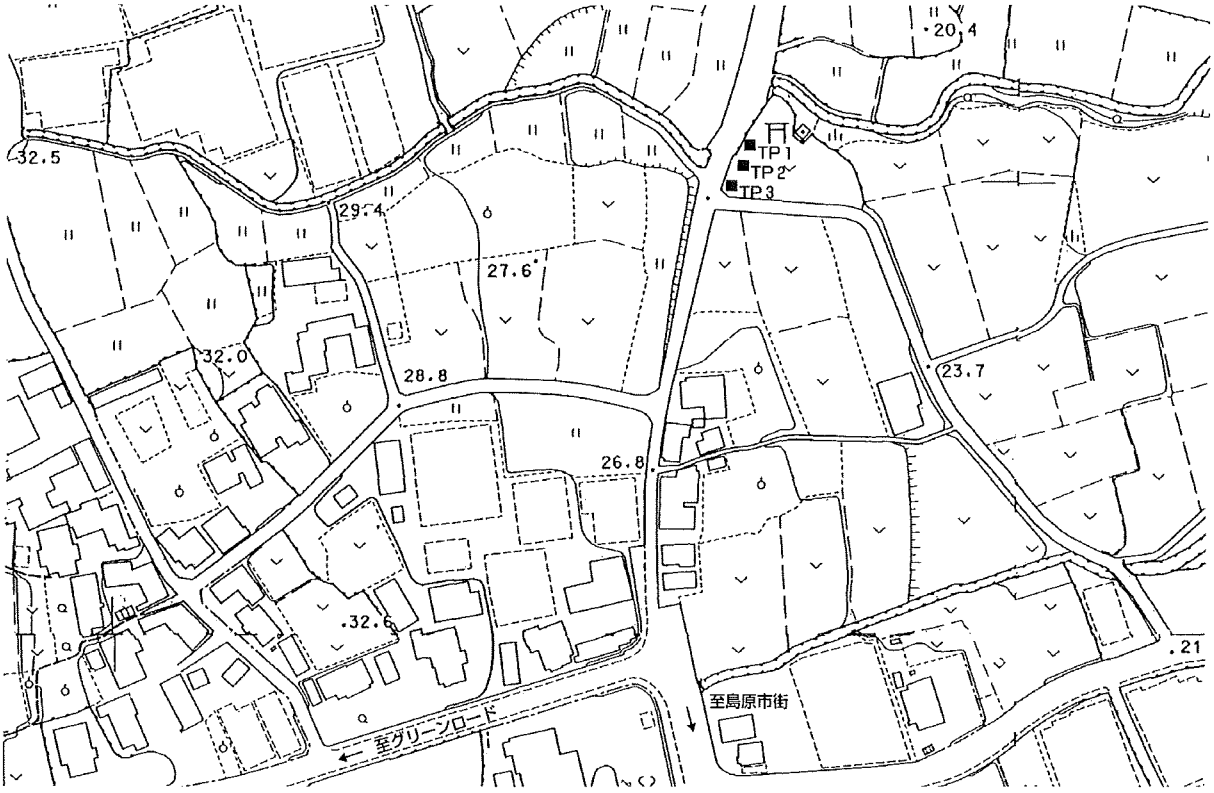


ＴＰ３北壁

まとめ

今回の調査は，稗田原遺跡の遺跡範囲の北端とその隣接地を行ったが，遺物包含層は確認されなかった。しかし，耕作土内には少量の中～近世の遺物も含まれることから，本来はこの場所まで遺物包含層が広がっていたと考えられる。道路建設や，畑地転用の際に削平をうけている可能性が高い。

【調査担当：山下・平田】(文責：平田)



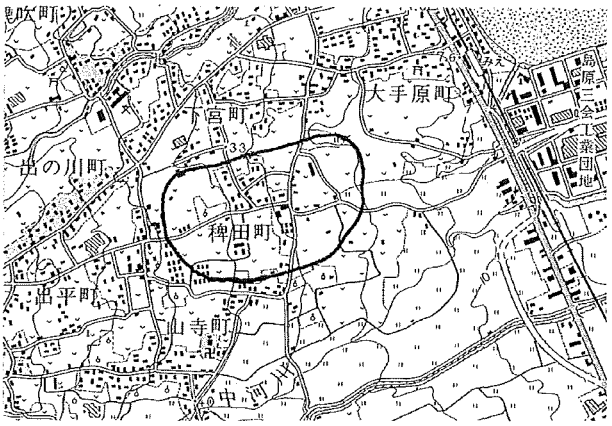
調査区位置図 (1/2,500)

⑨ 稗田原遺跡（ひえだぼる）

所 在 地	島原市稗田町	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	一般県道野田島原線道路改良工事	**調査面積**	114㎡
調査期間	平成 18年2月20日～平成18年3月3日	**調査区分**	本発掘調査
報 告 書	平成18年度刊行予定	**処　　置**	調査後工事

立　地

遺跡の所在する稗田町は，島原半島東部に位置している。遺跡は雲仙岳から派生した火山性扇状台地（三会原）上に展開しており，標高は約 27 m前後である。三会原の南西には雲仙岳山系である眉山や普賢岳が迫り，東には有明海をはさみ，熊本県の西岸部を望むことができる。このような地勢から，火山活動によってもたらされた降灰層が良好な状態で残っており，鬼界アカホヤ火山灰や六ッ木火砕流などが確認されている。これらは，考古学的要素だけではなく，火山活動による自然災害の痕跡としての要素を持ち合わせており，多くの分野での研究対象とされている。火山灰層の中には，農業に適した肥沃な土も含まれており，周辺一帯は県内でも有数の農業地帯になっている。現在は，畑地や水田として広く利用されており，人参やレタス，ショウガや稲などが盛んに栽培されている。



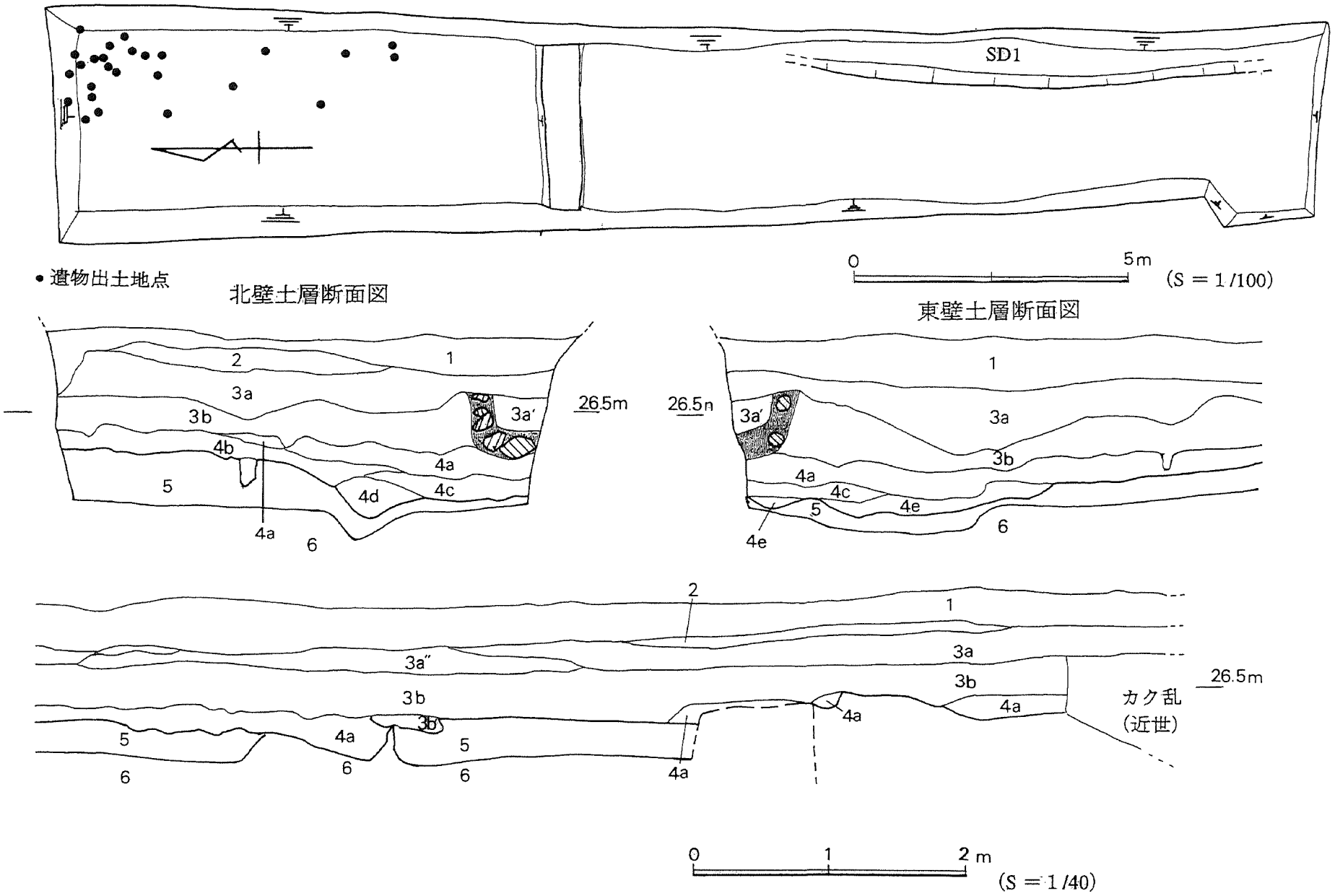
稗田原遺跡位置図［島原］（S=1/25,000）

調　査

島原振興局により，一般県道野田島原線の道路改良工事が計画された。工事予定箇所は，現稗田町バス停より北側である。これを受け，平成 17 年 5 月に範囲確認調査を実施した。その結果，現道より西側一帯において中世の良好な遺物包含層が確認された。今回本調査を実施した地点は，範囲確認調査時にはビニールハウスが設置されており，調査を行えなかった地点である。しかし，隣接地に設置した試掘坑Ａ～Ｃ区の状況から，遺物包含層がこの地点まで広がる可能性が十分にあり，今回本調査を実施することとなった。調査地点は，本調査の対象となった中でも最南端である（285 番地）。

土層堆積状況は以下の通りである。

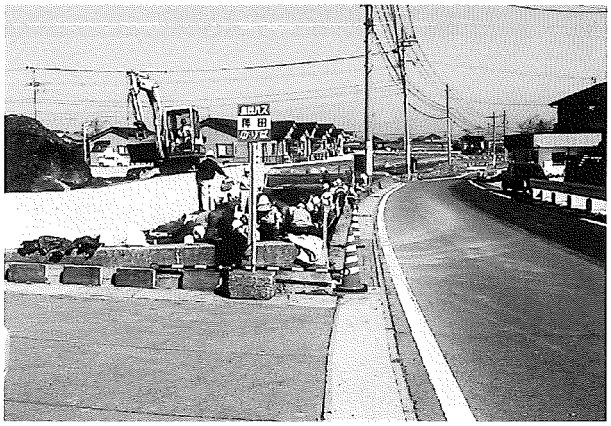
１　層：黒 褐 色 土（表　土）
２　層：黒 褐 色 土（床　土）
３ａ層：黒 褐 色 土（しまりが弱い，近・現代の整地層）３ａ'層・３ａ"層：黒 褐 色 土
３ｂ層：黒 褐 色 土（しまりが弱い，３ａ層に比べ黒みが増す。近世陶磁器が出土）
４ａ層：黒　色　土（３層に比べ黒みを増す，中世遺物が出土）
４ｂ層：黒 褐 色 土（少量のパミスが混じる，中世遺物が出土）
４ｃ層：黒 褐 色 土（堅くしまり，直径１㎝程度の礫が混じる）４ｄ層：黒 褐 色 土
５　層：褐色砂質土（非常に堅くしまっており，人頭大の礫を多く含む。無遺物層）
６　層：明褐色砂礫（直径１㎝～拳大の礫と砂を多く含む）



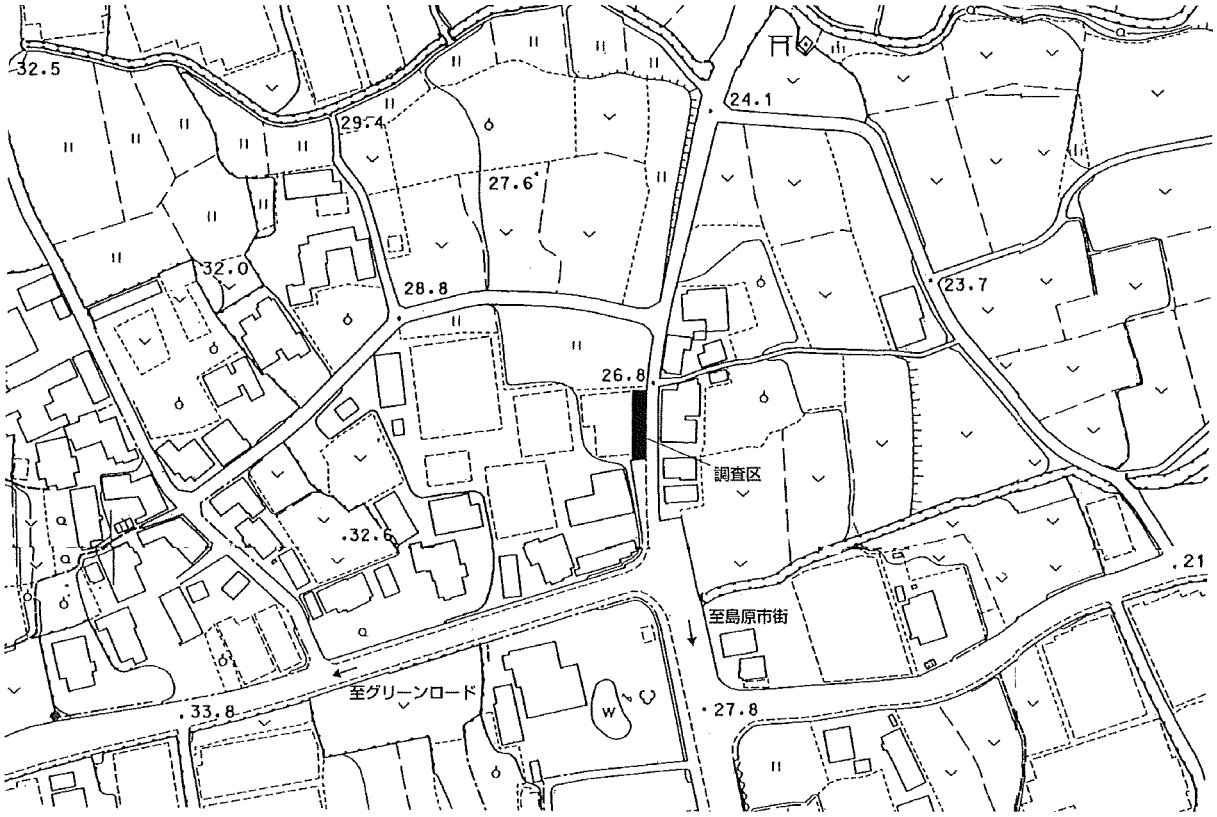
遺構配置図・４層出土遺物ドットマップ（１/100）・土層断面図（1/40）

調査では，調査区の半分程度が近・現代段階(1~3b層)に大きく削平されていることがわかった。北部に残存する4層(黒色土)からは龍泉窯系青磁碗や東播系捏鉢，滑石製石鍋などが出土した。検出した遺構は，南部の溝状遺構(SD1)である。上部削平により掘り込み面は確認できなかったが，覆土内から14世紀の龍泉窯系青磁碗などが出土している。

5層からの遺物出土はみられなかった。また，6層の砂礫層では，遺物の出土はみられなかったが，土層堆積状況を確認するため一部重機で掘り下げを行った。砂礫は褐色，赤褐色，褐灰色と色調を変えながら，幾重にも重なり2m以上も厚く堆積していた。



調査区近景（北から）



調査区位置図(S=1/2,500)

まとめ

調査区の約半分が大きく削平をうけているが，19世紀～20世紀の遺物が多数出土していることから，このころに大きな造成が行われているようである。中世の遺物包含層は北部に残存するだけで，南部においては確認できなかった。しかし，検出したSD1の覆土内から出土した遺物により，本来は南部にも中世の遺物包含層が広がっていた可能性が考えられる。北部で確認された4層は，北西に向かい厚く堆積しているため，調査区より北西側には良好な包含層が残存している可能性が高い。6層にみられる砂礫層は，その堆積状況から水成堆積と考えられる。中世以前の当該地区には，長期間に渡り水が流れていた時期が存在するようである。

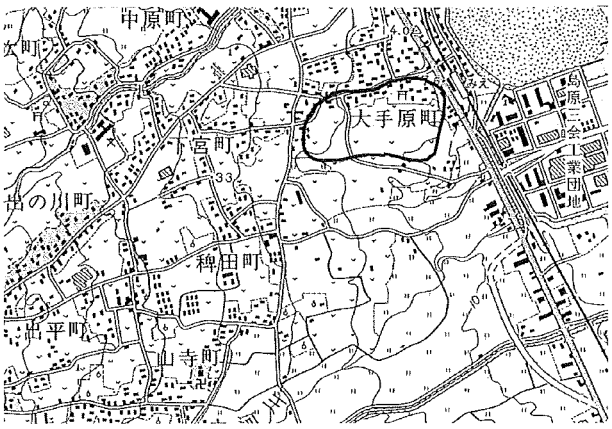
【調査担当：山下・平田】（文責：平田）

⑩ 下宮遺跡（しもみや）

所 在 地	島原市下宮町	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	一般県道野田島原線道路改良工事	**調査面積**	12㎡
調査期間	平成18年2月20日～平成18年3月3日	**調査区分**	範囲確認調査
報 告 書	平成18年度刊行予定	**処　　置**	本調査

立　地

遺跡の所在する下宮町は，島原半島東部に位置している。遺跡は雲仙岳から派生した火山性扇状台地（三会原）上に展開しており，標高は約 27 m前後である。三会原の南西には雲仙岳山系である眉山や普賢岳が迫り，東には有明海をはさみ，熊本県の西岸部を望むことができる。このような地勢から，火山活動によってもたらされた降灰層が良好な状態で残っており，鬼界アカホヤ火山灰や六ッ木火砕流などが確認されている。これらは，考古学的要素だけではなく，火山活動による自然災害の痕跡としての要素を持ち合わせており，多くの分野での研究対象とされている。火山灰層の中には，農業に適した肥沃な土も含まれており，周辺一帯は，県内でも有数の農業地帯になっている。現在は，畑地や水田として広く利用されており，人参やレタス，ショウガや稲などが盛んに栽培されている。



下宮遺跡位置図［島原］（S=1/25,000）

調　査

島原振興局により，一般県道野田島原線の道路改良工事が計画された。工事予定箇所は現稗田町バス停より北側である。これをうけ，今回下宮遺跡の範囲確認調査を行った。調査区は現道の東側にあたり，北側には市営住宅が隣接している。試掘坑（以下 TP と略す）は 2 × 3 mを 2 箇所（12 ㎡）設定した。TP 番号は北から南に向かい 1・2 と割り振りした。

土層堆積状況は以下の通りである。

TP1

Ⅰ層：表　　土

Ⅱ層：黒 褐 色 土

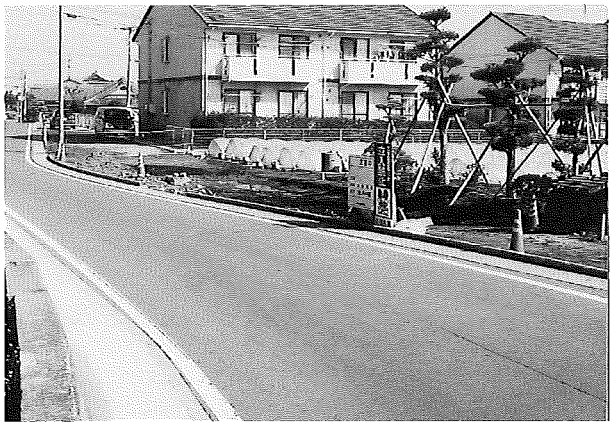
Ⅲ層：黒 褐 色 土（Ⅱ層より赤みを帯びる）

Ⅳ層：暗赤褐色土（オレンジ色のパミスが混じる）

Ⅴ層：黒 褐 色 土（白・ピンク色のパミスが混じる）

Ⅵ層：黒 褐 色 土（Ⅴ層より灰色味を帯びる）

Ⅶ層：にぶい黄褐色土（非常に硬く，人頭大の礫を含む）


調査区近景（南から）

TP2

Ⅰ　層：表　　土

Ⅱ　層：暗赤褐色土（オレンジ色のパミスが混じる）

Ⅲ　層：黒　色　土

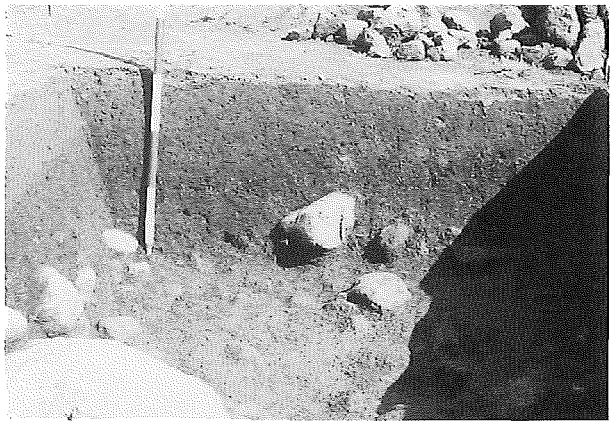
Ⅳ　層：暗 褐 色 土（しまりは弱い，ブロック状の黄色土が入る）

Ⅴ　層：黒 褐 色 土（しまりは弱い，炭化物と小礫を少量含む）

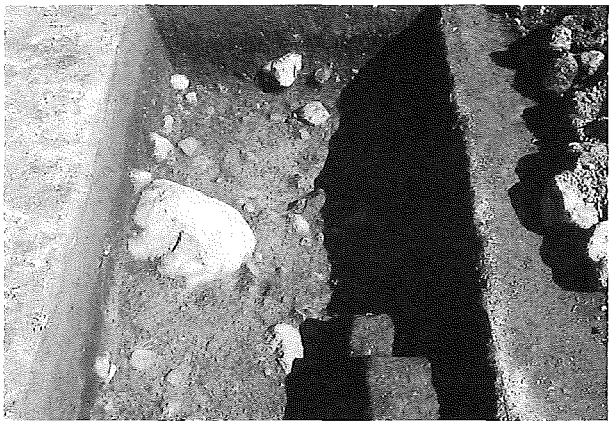
Ⅵａ層：黒 褐 色 土（Ⅴ層より灰色味を帯びる）

Ⅵｂ層：にぶい黄褐色土（非常に硬く，人頭大の礫を含む）

TP2 のⅡ層は，TP1 のⅣ層と同一層である。TP2 のⅢ・Ⅳ層は TP1 のⅤ層と同一層である。TP1 のⅣ・Ⅴ層からは古代～中世に至る時期の遺物が出土した。また，TP2 もそれと同様の層位から同時期の遺物が出土している。これらの層位から出土した遺物は，ローリングを受けていないことや，接合関係がみられることから原位置をさほど動いていないようである。また，TP2 のⅣ層はしまりが弱く，ブロック状の黄色土が入るという様相をみせている。

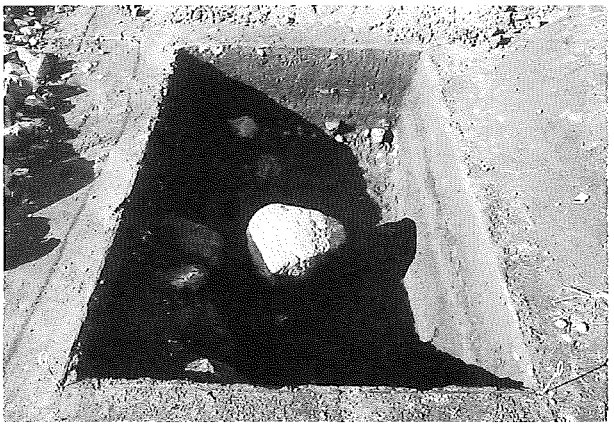


ＴＰ１東壁

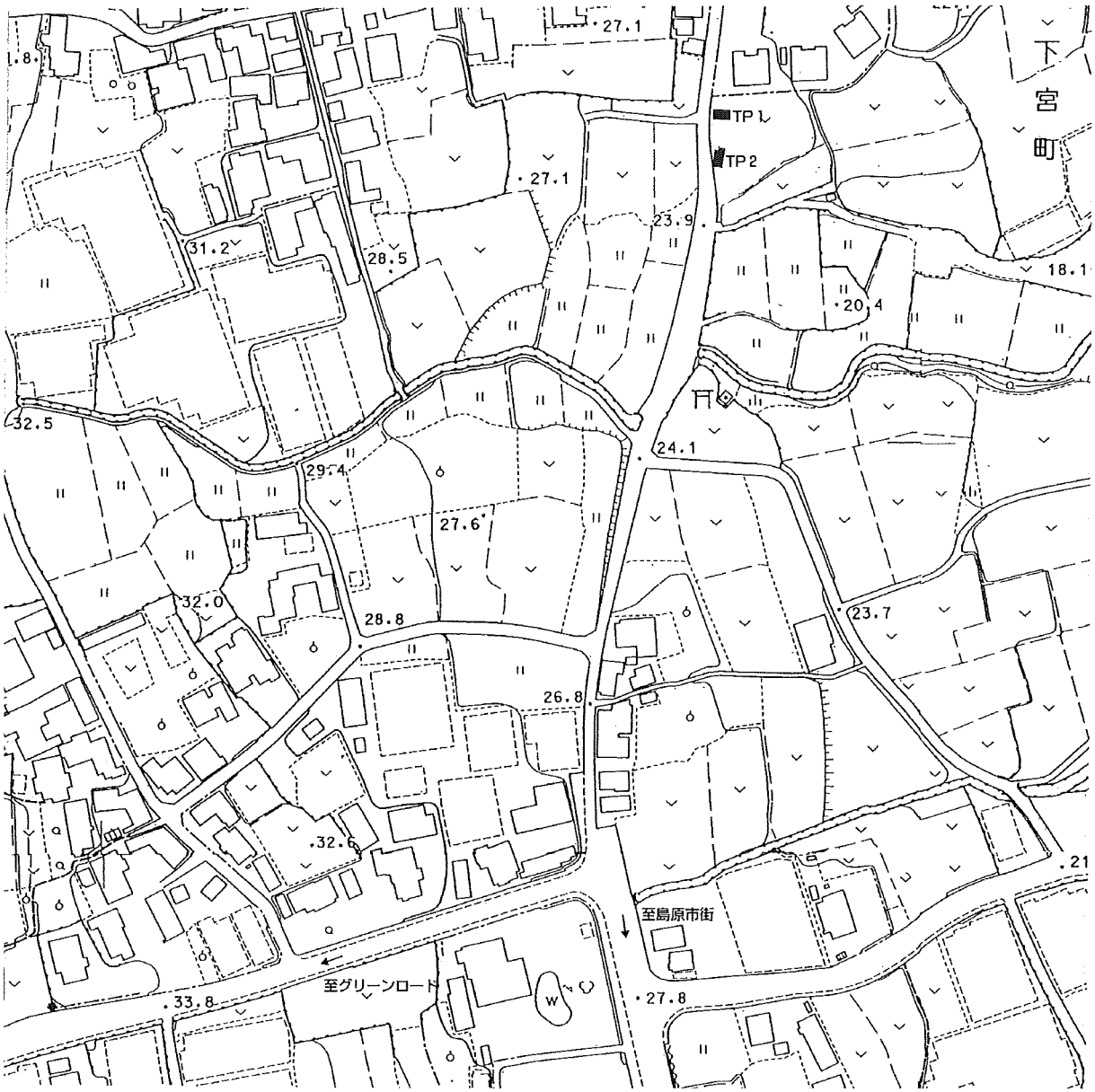


ＴＰ１完掘（西から）

ＴＰ２東壁



ＴＰ２完掘（南から）



調査区位置図(S=1/2,500)

まとめ

調査の結果，工事予定箇所の下には，古代～中世に至るまでの遺物包含層が残存していることがわかった。特に，TP2 のⅣ層は，堆積状況や遺物が比較的まとまって出土することから古代の遺構である可能性が非常に高い。しかし，たち上がりなど遺構の形態を示すものは確認できなかった。TP2 の東壁を包み込むかたちで遺構が存在していると想定すると，比較的大型のものであろう。これらのことから，当該地は本調査を実施する必要がある。

【調査担当：山下・平田】（文責：平田）

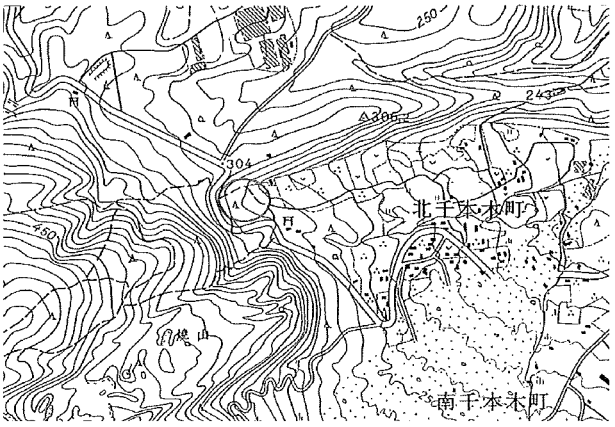
⑪ 肥賀太郎遺跡（ひがたろう）

所 在 地　島原市北千本木町
調査原因　県道愛野島原線上流付け替え工事等整備工事
調査期間　平成 17 年 9 月 20 日～平成 17 年 12 月 20 日
報 告 書　平成 18 年 3 月刊行
調査主体　長崎県教育委員会
調査面積　1,700 ㎡
調査区分　本調査
処　　置　調査後工事

立　地

島原半島北東部の地勢は，雲仙火山群と火山性山麓扇状地で構成されるが，この火山性山麓扇状地を小河川が開析し分断することで，独立性の高い台地状の地形を形成している。縄文時代の遺跡群は，この開析された扇状地上に立地する場合が多く，特に広大な緩斜面を控えた扇状地には，拠点集落と考えられる大規模遺跡が存在する場合が多い。

肥賀太郎遺跡は，標高 270 ～ 280 m の火山性扇状地に立地している。狭い谷間に面しているため扇状地の規模は小さく，遺跡の範囲も推定約 20,000 ㎡と比較的小規模である。



肥賀太郎遺跡位置図［島原］（S=1/25,000）

遺跡の北方，直線距離にして約 1km には，同時期の拠点遺跡と考えられる礫石原遺跡があるが，肥賀太郎遺跡の調査は，拠点遺跡と小規模遺跡の関係を探る上でも興味深い調査となった。

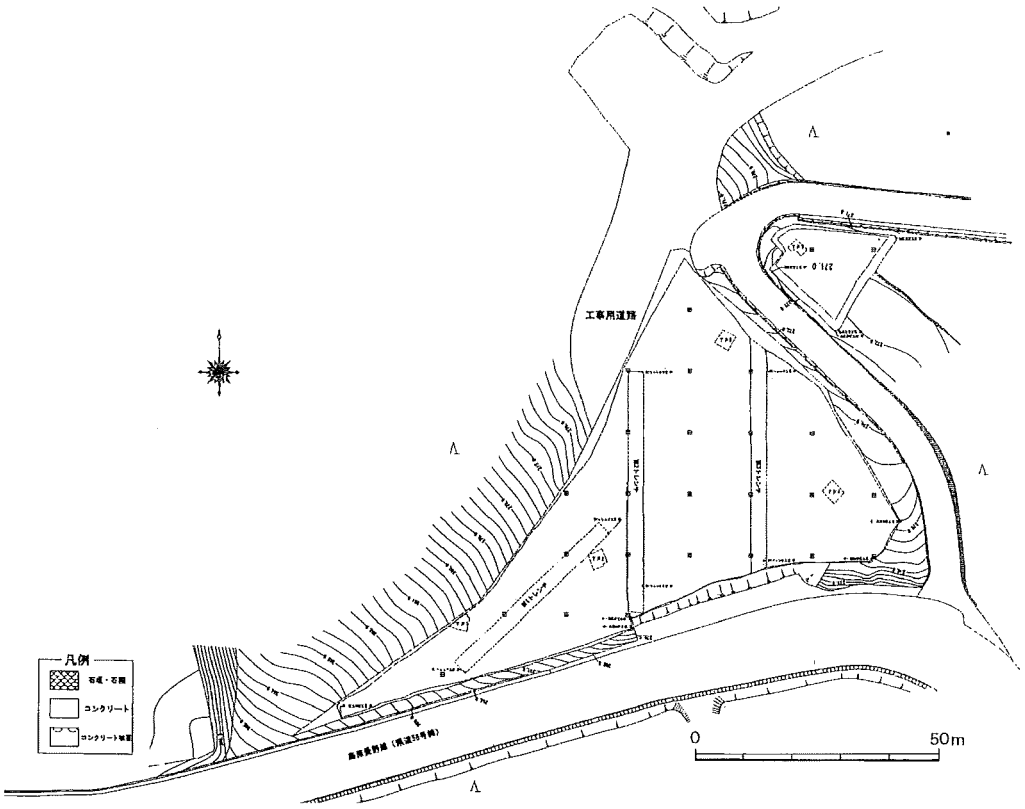
調　査

本調査は，現県道との付け替え部分に相当する 1,700 ㎡が対象となった。基本土層は以下の通りである。

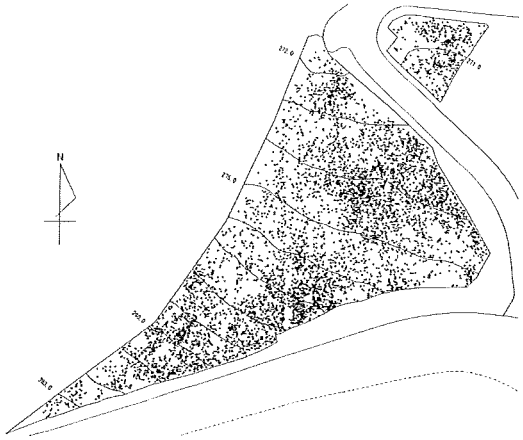
Ⅰ層…にぶい橙色土　1990 年以降に降灰した火山灰
Ⅱ層…黒褐色土
Ⅲ層…黄褐色土
Ⅳ層…黒褐色土
Ⅴ層…黒色土
Ⅵ層…暗褐色礫混じり層
Ⅶ層…基盤層（いわゆるカシノミ層）

調査風景

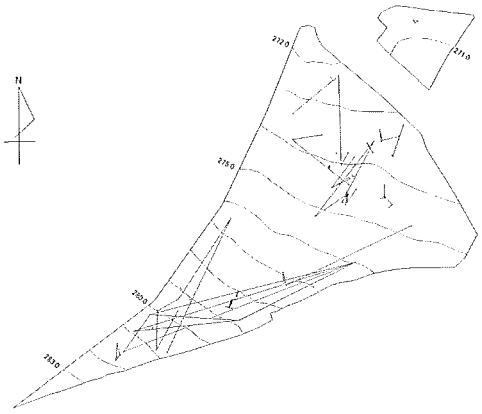
遺物包含層は，Ⅱ層～Ⅳ層（縄文時代晩期），Ⅴ層（縄文時代早期）である。



調査区位置図



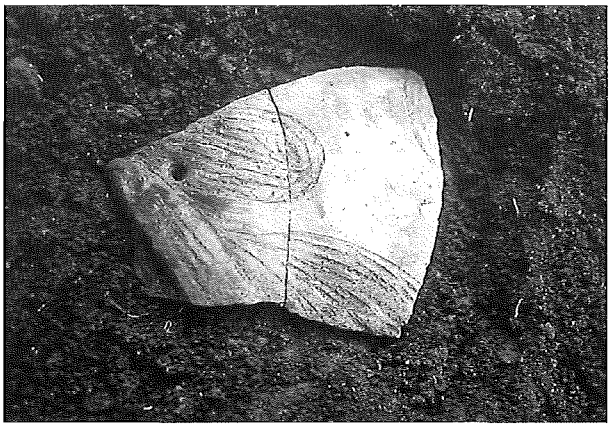
縄文土器出土状況



遺物接合関係

出土遺物は，トータルステーションにより出土位置を記録しながら取り上げたが，結果的に約 12,000 点もの大量の遺物が出土した。うち縄文時代早期の遺物はごく少量で，99 %以上を縄文時代晩期の遺物が占めており，該期の単純遺跡に近い様相であった。縄文時代晩期の土器は，黒川式併行の土器群で，深鉢・浅鉢・鉢・皿・ミニチュア土器などで構成される。器形のわかる資料が比較的多く，該期の土器編年に関する良好な資料を提供した。

縄文土器出土状況①

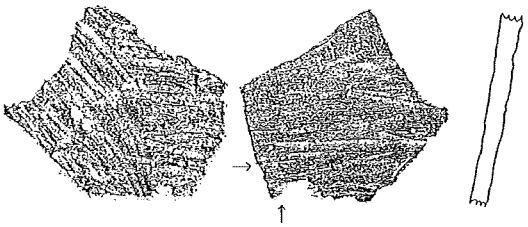


縄文土器出土状況②

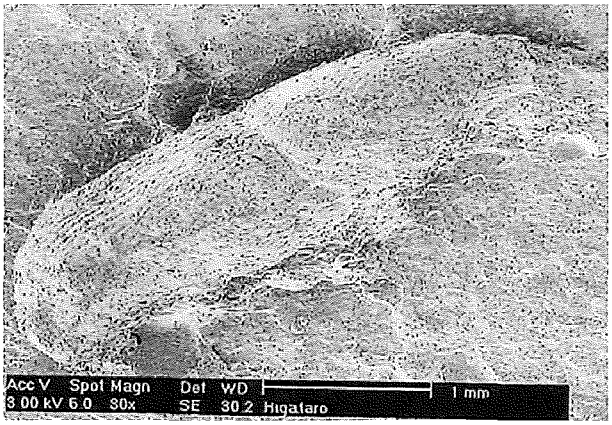
	石器製作加工具			狩猟具	植物採集加工具					漁撈具	工具						その他
	石核	剥片	円盤状石器	石鏃	打製石斧	磨石	敲石	凹石	石皿	石錘	磨製石斧	石匙	スクレイパー	楔形石器	石錐	砥石	十字形石器
Ⅱ層～Ⅳ層	268	2752	43	69	50	17	12	1	26	5	8	6	185	4	2	12	1
Ⅴ層		7															

出土石器組成表

石器では，スクレイパーが最も多く，次いで石鏃・打製石斧・石皿・磨石の順になる。また，夥しい数の剥片類や石核も出土しており，石器製作を盛んに行っていたようである。このほか，注目すべき成果として，縄文時代晩期の土器からコクゾウムシの圧痕を検出したことが挙げられる。コクゾウムシは，イネ・ムギ・トウモロコシなど貯蔵された穀類の害虫である。島原半島では，これまで該期の石器組成などから穀物栽培の存在が推測されてきたが，コクゾウムシ圧痕の検出により穀類の存在が明確となったことは，該期の生業を考える上で特筆すべき成果といえる。



圧痕の付いた土器片（1/3）



レプリカ法で検出したコクゾウムシ圧痕画像

まとめ

今回の調査では，縄文時代晩期の土器・石器などが，約 12,000 点と大量に出土した。特に，縄文土器は器形が判別できる個体も多く，島原半島における該期の土器編年を組み立てる上で貴重な資料となるだろう。このほか，土器圧痕の検討により穀類の害虫であるコクゾウムシを検出できた点は，穀物栽培の存在を明確に示唆する点で重要な意義を持つものである。

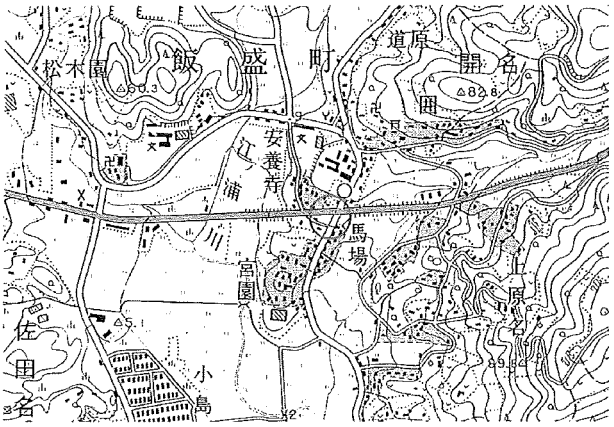
【調査担当：中尾・和田・川口・平田】（文責：中尾）

⑫ 開遺跡（ひらき）

所 在 地	長崎県諫早市飯盛町開	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	主要地方道諫早飯盛線交通安全施設等整備工事	**調査面積**	19 ㎡
調査期間	平成 17 年 5 月 30 日～平成 17 年 6 月 6 日	**調査区分**	範囲確認調査
報 告 書	平成 18 年度刊行予定	**処　　置**	調査後慎重工事

立　地

開遺跡は，飯盛町の中央部に拡がる後背湿地の北東部に位置し，標高 15 ～ 16 mの舌状台地の中央部に立地する。周辺には囲城跡，岡城跡，普同寺下遺跡など中世の遺跡が点在する。



開遺跡位置図［諫早南部］(S=1/25,000)

1971（昭和 46）年の国道 251 号線道路改良工事に伴う緊急発掘調査の際には，交差点の北東地点より柱穴状ピット群・溝状遺構などの遺構や，土師質土器・須恵器・青磁・滑石製品などが検出されており，開遺跡が中世の集落跡であった可能性が指摘されている（『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅴ』1982）。また，平成 16 年度に行った主要地方道諫早飯盛線道路改良工事に伴う範囲確認調査において，交差点の北西地点より柱穴状のピット 9 箇所，土壙 1 基・溝状遺構 1 条などの遺構と，土師質土器・白磁・青磁・滑石製石鍋などが出土し，交差点付近に良好な遺物包含層が存在することが明らかとなった。

調　査

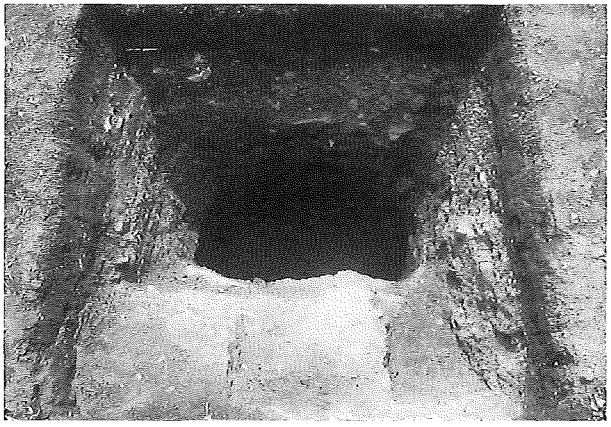
国道 251 号と県道の交差点の南西地点に，2 m × 2 mの試掘壙（前年度からの連番で北から TP4 ～ 7）を 4 箇所，2 m × 1.5 mの試掘壙（TP8）を 1 箇所設定した。調査地点の現状は TP4 ～ 6・TP8 は畑地，TP7 は宅地の解けた跡の空き地である。この付近は 40 年ほど前まで水田であったが，盛土して現在の標高となっている。表土層から人力で掘削を開始したが，表土下は拳大～人頭大の礫およびバラスなどが 1m 以上堆積しており，調査は困難を極めた。そのため，5 箇所の調査区のうち，人力による掘削の不可能な 2 箇所（TP5・TP7）を除き調査を実施した。

遺跡近景（北から）

TP4 は最も北側の調査区で，交差点に最も近い。耕作土（約 20cm）・客土（約 1m）の下に黄灰色粘質土（旧水田面）を検出し，さらに 40cm 掘り下げると地山と思われる灰オリーブ色の岩盤となった。遺構や遺物は検出できなかった。

TP6 は TP4 の南約 20 m地点に設定した。土層の堆積状況は TP4 とほぼ同様で，地山の直上にブロック状に残る黒色粘質土から中世青磁片 1 点，時期不明の摩滅した土器片が数点出土した。遺構は検出できなかった。

TP8 は TP6 の南約 35m 地点に設定した。耕作土(約 25cm)の下は客土が 130cm 以上堆積しており，整層状態を確認することはできなかった。



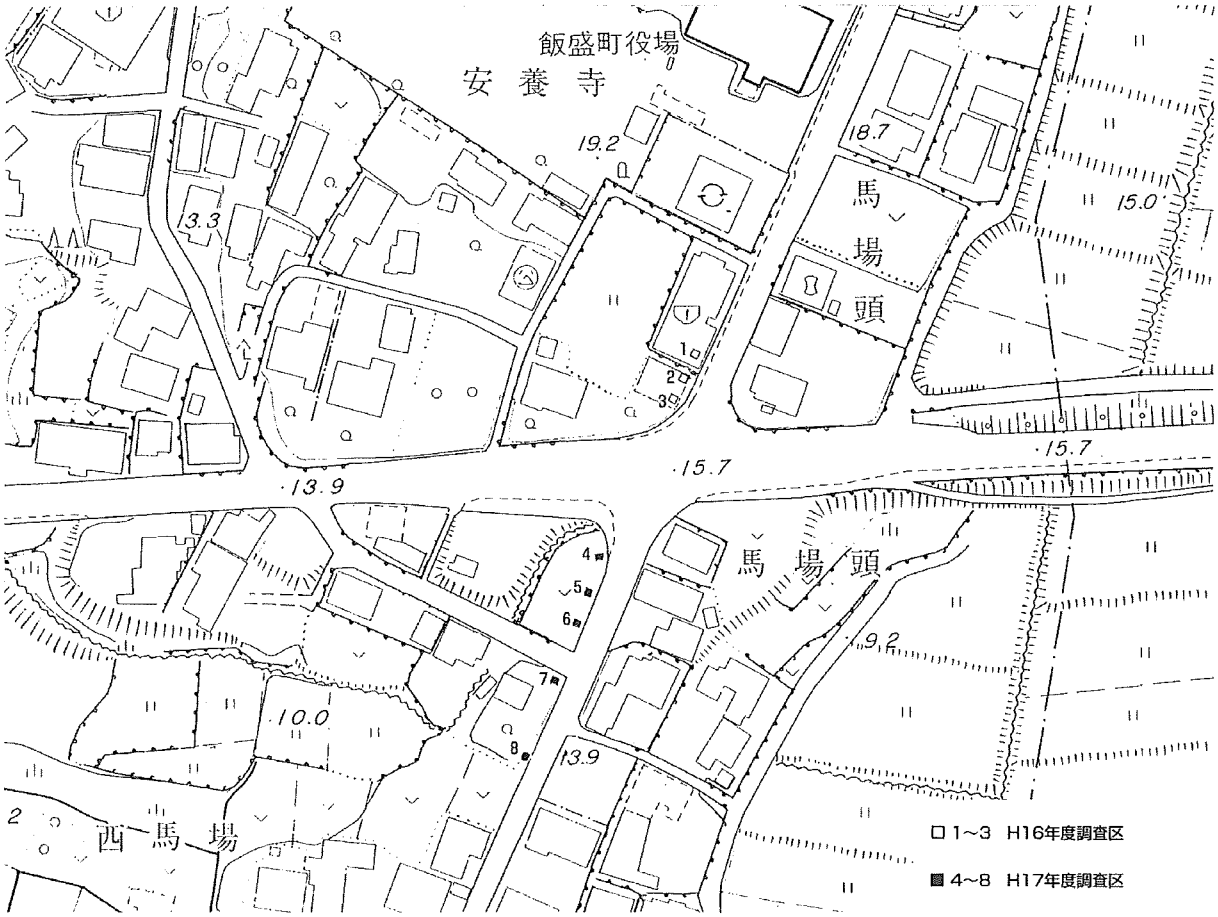
ＴＰ４完掘状況

ＴＰ６客土上面

まとめ

今回の調査の結果，いずれの試掘壙においても遺物包含層および遺構は確認できなかった。TP6 に見られた遺物はその出土状況から，この地点が削平を受けた後の残りか，流れ込みである可能性が高い。これまでに行われた調査結果から，開遺跡の中心は国道よりも北側に存在するものと思われる。

【調査担当：山下・平田】(文責：山下)



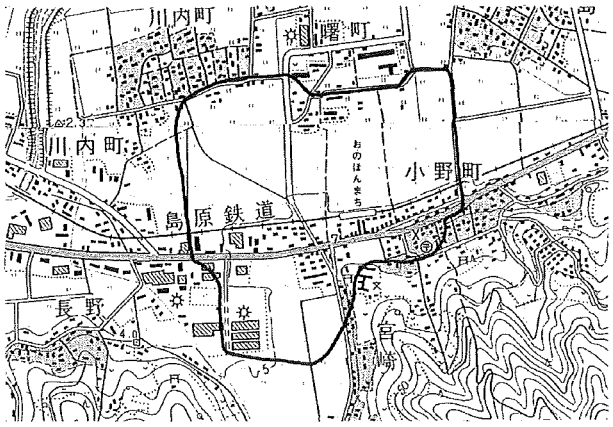
調査区位置図(1/2,000)

⑬ 小野条里遺跡（おのじょうり）

所 在 地	諫早市小野町・宗方町	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	一般国道 57 号森山拡幅事業	**調査面積**	175 ㎡
調査期間	平成 17 年 8 月 22 日～平成 17 年 10 月 14 日	**調査区分**	範囲確認調査
報 告 書	平成 19 年度刊行予定	**処　　置**	本調査

立　地

諫早市小野地区（小野町・川内町・小野島町・宗方町・長野町）は，諫早市東部に拡がる諫早平野の南側に位置し，北は有明海（諫早湾）に面し，南は標高 247m の金比羅岳から派生した丘陵部に接している。小野条里遺跡は，この小野地区中央の平野部に所在し，標高 3 ～ 5 m付近に立地する。現在大部分は水田として利用されているが，国道 57 号沿いや丘陵先端部の宅地や商店が密集している地域も含まれる。



小野条里遺跡位置図［諫早・諫早南部］（S=1/25,000）

この小野地区には，二ノ坪・三ノ坪・四ノ坪・五ノ坪・ 八ケ坪・大坪などの坪数詞名が残ることから，条里遺構の存在が想定されている（『諫早市史』1955〔昭和 30〕年・『多良山麓研究』1965〔昭和 40〕年）。1986 年～ 1988 年（昭和 61 ～ 63）には諫早市教育委員会によって条里遺構の存否・限界及び成立年代の推定などを目的に範囲確認調査が実施された。その結果，畦畔や杭列などが検出され，条里制に係わる遺構であると推測された。また，1994（平成 6）・1995（平成 7）年には，県営水田営農活性化排水対策特別事業に伴う調査が，小字「曽屋」・「扇町」において実施され，弥生～古墳時代と思われる杭列や縄文晩期の遺物などが検出されており，水田耕作関連の遺跡であると考えられている。

隣接する遺跡としては，弥生時代や中世の杭列を検出した宗方筒井遺跡（小野宗方遺跡・小野堀口遺跡），旧石器～中世の遺物が確認された宮崎館遺跡，中世の小野城跡などが，小野条里遺跡の後背地にあたる南側丘陵先端部とその西側平地に分布している。

調　査

45 箇所の試掘壙（TP 1 ～ 45）を設定し，175 ㎡について調査を実施した。東西に走る国道 57 号の北側の西から東へ TP 1 ～ 28，国道南側の東から西へ TP29 ～ 45 と設定し，2 × 2 mの試掘壙を基本に調査を行った。調査地区は建物が立ち退いた跡地がほとんどであったので，事前にコンクリート剥ぎと客土の除去を実施し，その後人力による掘り下げを開始した。

遺跡遠景

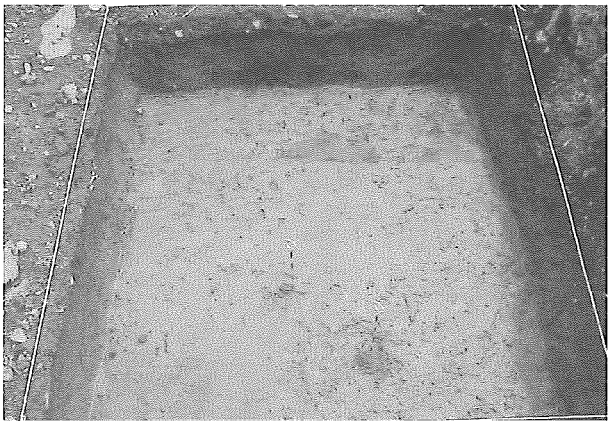
調査範囲が東西 900 mと長く，土層の堆積状況は一様ではないが，概ね TP22 と TP23 を境として基盤層の相違が見られる。すなわち，TP22 から西側は

粘質土が厚く堆積し，基本的に青灰色粘土層が無遺物の地山層であると考えられる。TP23 から東側は近世以降に整地された礫層が堆積し，若干の粘質土も部分的に見られるが，基盤は黄褐色岩盤の地山層である。このような土壌基盤を反映し，立杭などの遺構が TP3・13・18・20 に見られ，ピットなどの遺構が TP31・38・39 で検出された。立杭については，TP13 の杭は出土遺物から近世以降の遺構と考えられる。その他の立杭は出土遺物がほとんど無いため時期は不明である。ただし，TP18 の杭は出土状況および丸太材や杭の残存状況から近現代の遺構である可能性が高い。ピットについては，ピット内遺物および周辺出土遺物より TP31 が中世以前，TP38 が縄文時代，TP39 が近世以降である可能性が高い。また，TP29 からは弥生中期(須玖式)の土器片・土師器・黒曜石片，TP38 からは縄文前期(曽畑式)・縄文後期(阿高式)・弥生中期(須玖式)の土器片・土師器・黒曜石剥片などが出土しており，周辺に遺物包含層が残存している可能性がある。TP24・25・27 は，須恵器・土師器・青磁・白磁などが出土しているが，近世以降の陶磁器類と混在して出土しており，2 次的堆積であると考えられる。

まとめ

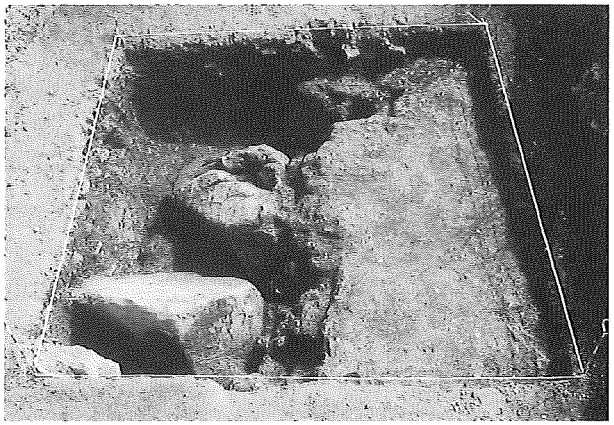
以上の調査結果から，TP29 ～ TP39 周辺には縄文・弥生時代以降の遺構及び遺物包含層が埋蔵していることが確実であり，その実態を明らかにしておく必要がある。また，TP3 検出の杭については，時期や性格，杭列の方向を確認し，条里制遺構との関連の有無を明らかにする必要があろう。

【調査担当：山下・平田】(文責：山下)

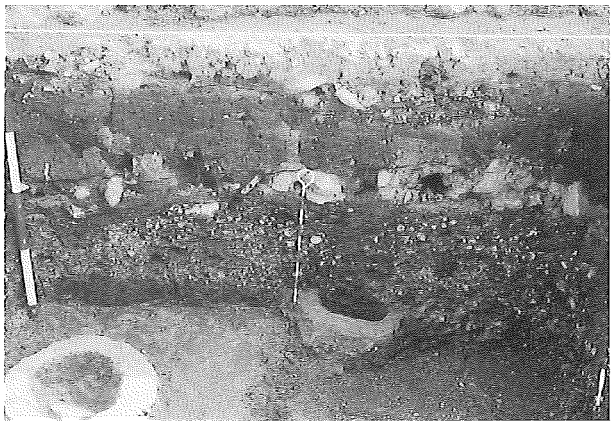


TP3杭検出状況（西から）

TP22東壁



TP29（西から・落込み）



TP31南壁（ピット出土状況）

諫早市
島原鉄道
諫早農協
小野支所
国道57号
小野派出所
小野郵便局
諫早市小野
簡易水道水源池
プール
小野公民館
宗方神社
小野小学校
宮崎
天満神社
小野保育園
西九州
コカ・コーラ
R=900
0
300m

試掘位置図

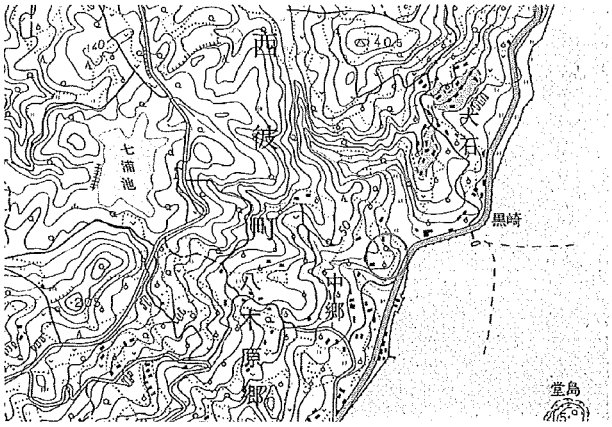
⑭ ヤボサ遺跡

所 在 地	西海市西彼町八木原郷馬場	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	一般国道 206 号道路改良工事	**調査面積**	12㎡
調査期間	平成17年4月25日～4月28日（4日間）	**調査区分**	範囲確認調査
報 告 書	刊行予定なし	**処　　置**	慎重工事

立　地

ヤボサ遺跡は，大村湾に面した丘陵頂部に立地する。

ここは『大村郷村記』に記載のある城明城跡に比定され，『西彼町郷土誌』にも「矢房権現の左手に本丸跡があり，～」の記述がみえる。



ヤボサ遺跡位置図［面高］（S=1/25,000）

調　査

調査は，標高 30 mほどの丘陵鞍部に 2 m四方試掘坑（以下，TP と記す）を 3 箇所設け，東側から順に 2 桁の番号を付して行った。

TP01 は，沖永宅前のミカン畑に設置した。ここでは，造成により北～北東方向へ畑地を広げたような形跡がうかがえた。TP02 は，矢房権現を祀っていた場所の西隣に，TP03 は，そこから西側 10 m先に設けた。ともに，地山に混在する玄武岩の岩塊まで削平が及んでおり，山林を開墾したままの状態であることが判明した。TP01 ～ 03 のいずれも，表土下は，結晶片岩や玄武岩が混じる赤褐色粘質土層と岩盤からなり，遺物包含層や遺物等は見られなかった。

確認調査で得られたヤボサ遺跡の層序は，次のようになる。

第Ⅰ層は，明茶褐色土層（表土）で，親指～拳大の結晶片岩粒が白い斑点状に見られる。

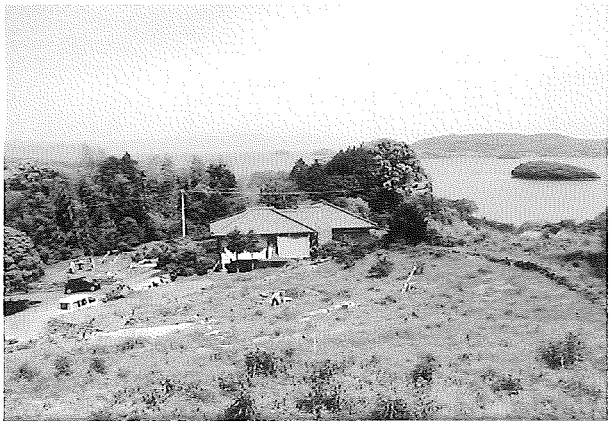
第Ⅰ’層は，第Ⅰ層と第Ⅱ層の中間層で，色調は第Ⅱ層に近く，全体にしまりがない。

第Ⅱ層は，赤茶褐色粘質土層で，白い斑点状の結晶片岩は含まれず，玄武岩質の礫が一部混入する。

第Ⅱａ層は，赤茶褐色粘質土層で，第Ⅱ層に白い斑点状の結晶片岩や 40 ～ 50 ㎝大の礫を含む。

第Ⅲ層は，赤褐色粘質土層（地山）で，場所によっては玄武岩質の大石が混在するところもある。

第Ⅲ’層は，赤褐色粘質土層で，風化した結晶片岩粒が局所的に堆積している。



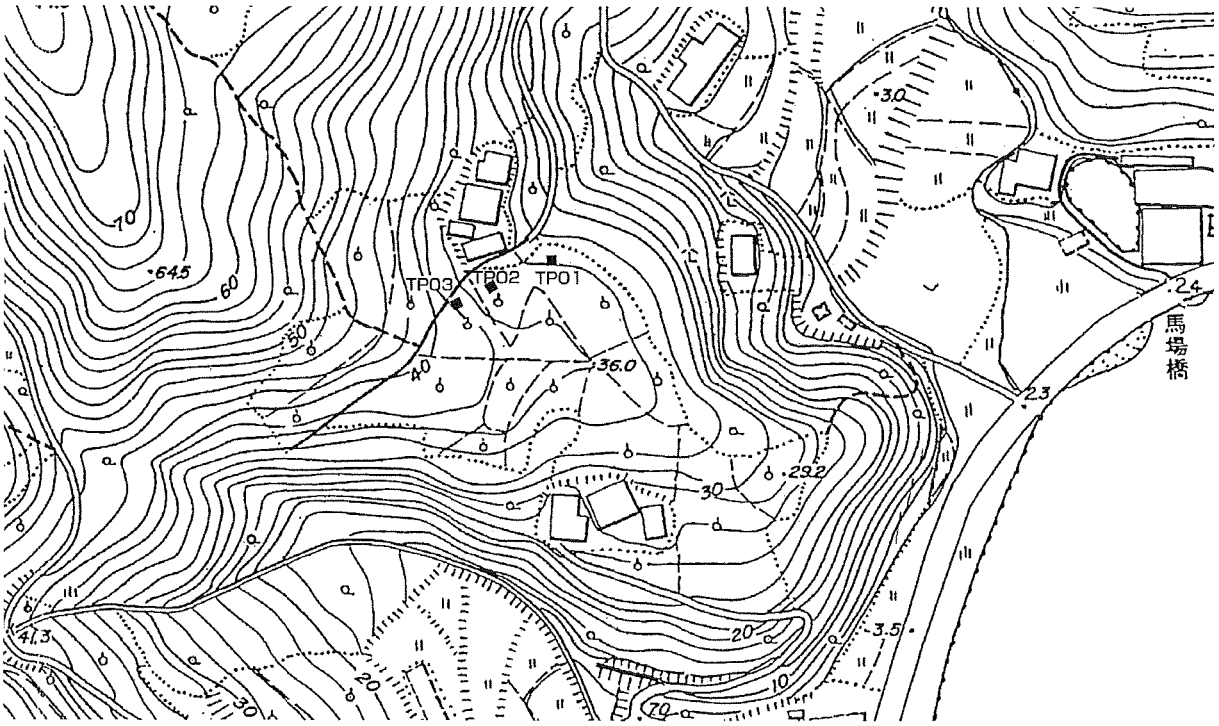
調査区遠景

TP03北壁土層

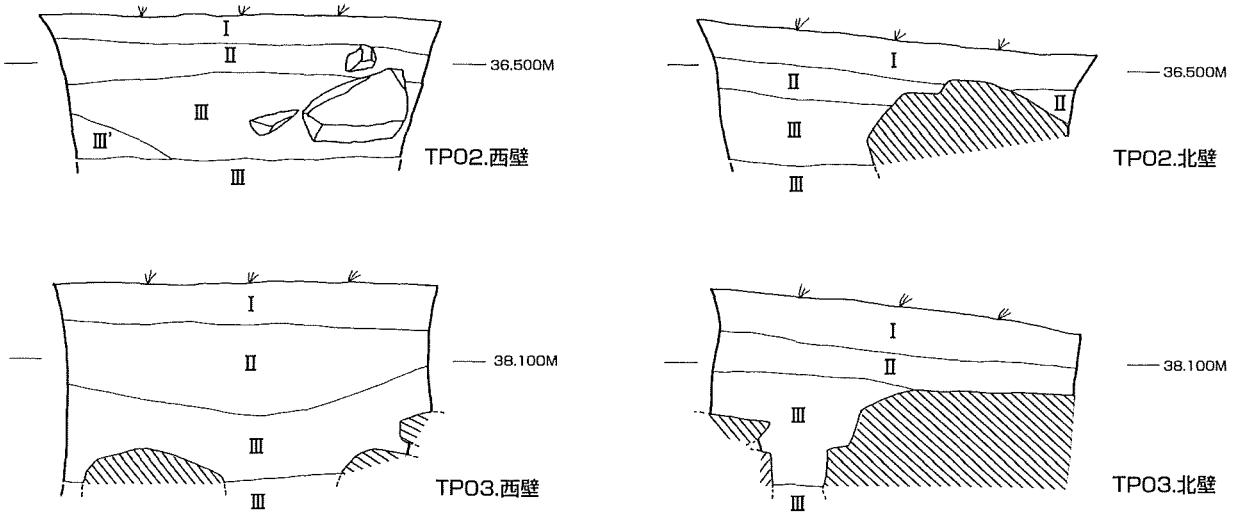
まとめ

今回の工事範囲では，遺物包含層や遺構は検出されず，出土遺物も無かったことから，遺跡の取扱いについては，慎重工事扱いとするのが妥当と考える。ただし，工事区北西側の丘陵斜面には，石鍋未製品の散布が見られるほか，石鍋の石材採掘跡もあることから，今後，新たな開発行為が当該地で行われる場合は注意を要する。

［調査担当：本田］（文責：本田）



調査区配置図(1/2,500)



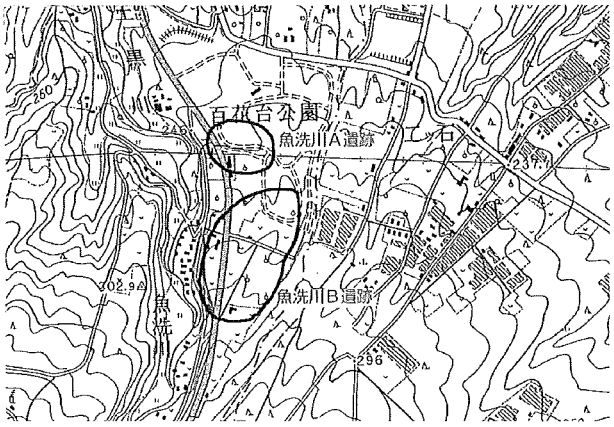
試掘壙土層断面図(1/40)

⑮ 魚洗川（いわれご）A・B遺跡

所 在 地	雲仙市国見町金山名	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	百花台広域公園拡張工事	**調査面積**	90 ㎡
調査期間	平成 17 年 11 月 30 日～平成 17 年 12 月 22 日	**調査区分**	範囲確認調査
報 告 書	刊行未定	**処　　置**	調査後，埋め戻し

立　地

百花台遺跡群は，島原半島北部の国見町に所在し，標高 200 ～ 250 mを測る火山性山麓扇状地の扇頂にあたる緩傾斜面に展開している。この遺跡群は，百花台 A ～ F 遺跡および魚洗川 A ～ C 遺跡からなり，魚洗川 A 遺跡および魚洗川B遺跡は，この遺跡群中最南端に立地する。百花台遺跡群の調査は，1963(昭和 38)年の和島誠一・麻生優による学術調査にはじまり，1982 ～ 1993(昭和 57 ～平成 5)年には長崎県教育委員会により百花台広域公園建設，県道国見～雲仙線改良工事，全国植樹祭会場整備事業などに伴う調査が行われた。また，これとほぼ同時期に，同志社大学・県立国見高校からなる百花台遺跡発掘調査団による学術調査が実施されている。これらの調査によって，縄文時代の遺物包含層のほか，旧石器時代の文化層が層位的に検出されており，この時代の石器組成や構造を解明する上で重要な成果が上がっている。



魚洗川Ａ・Ｂ遺跡位置図［島原］(S=1/25,000)

調　査

島原振興局により百花台広域公園の拡張計画が策定されたため，拡張予定地内の範囲確認調査を実施した。この範囲確認調査は平成 15 年度より継続的に実施しているもので，平成 16 年度の調査(地域拠点遺跡発掘調査事業)では縄文時代の遺構・遺物等が検出された。本年度の調査は，これまで未調査であった地区の調査と，平成 16 年度に検出した遺構・遺物の拡がりを確認することを目的に実施したものである。

作業風景

平成 16 年度の範囲確認調査で遺構・遺物が確認された地点を中心に，2 × 3 mの試掘壙を 15 箇所設定し調査を実施した。土層は場所によって若干の差異が見られるが，概ね百花台遺跡群の基本層序と同様である。

TP1~5 は，昨年 200 点ほどの縄文土器片・黒曜石剥片が出土した地点(E-8)の北側への拡がりを確認するため任意に設定した。TP6~14 も昨年縄文土器片と黒曜石剥片が出土した地点(F-14・F-15-1)の西側への拡がりを確認するために任意に設定した。TP15 は本年度行われた土取工事の際，整層状況が確認された地点に設定した。

15 箇所の試掘壙のうち，層位的に遺物を検出したのが２箇所(TP14・15)である。TP14 からは，部分的に残存するⅡ層から縄文土器片 13 点とⅥ層から黒曜石片 4 点が出土した。TP14 の遺物は，昨年度遺物の出土した地点(F-14・F-15-1)の西側への拡がりであると考えられる。TP15 からは，Ⅴ・Ⅵ層から黒曜石製石核などが出土した。この周辺には旧石器時代の包含層が良好に残っていることが考えられる。TP1~5 においては，遺物等がほとんど検出されず，E-8 の包含層は北側へ拡がることはないと思われる。その他の試掘壙については遺構・遺物ともに確認できなかった。

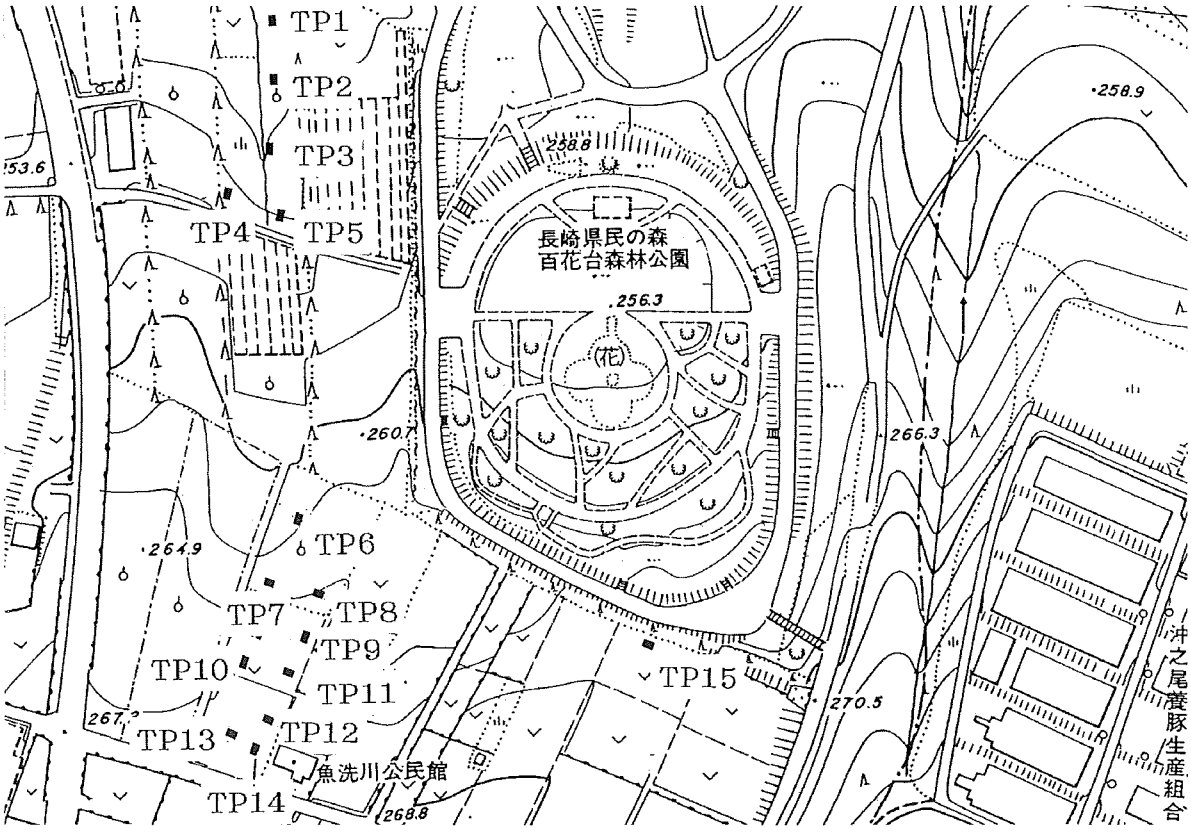
P14東壁

TP15東壁

まとめ

昨年度までの調査結果と合わせ，TP4・5 の南側約 1,500 ㎡，TP14 周辺(魚洗川公民館周辺)約 750 ㎡，TP15 周辺約 150 ㎡については，遺構や遺物包含層が残存している可能性が高く，今後の工事に際しては，事前に協議が必要である。

【調査担当：山下・平田】(文責：山下)



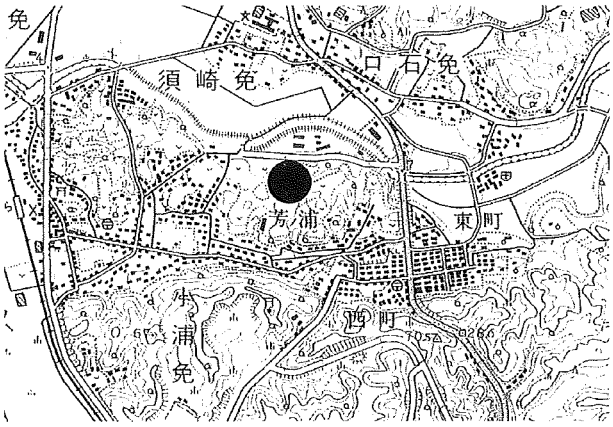
調査区位置図(1/2,500)

⑯ 末永（すえなが）遺跡

所 在 地	北松浦郡佐々町口石免字末永	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	西九州自動車道建設	**調査面積**	72㎡
調査期間	平成18年2月13日～2月28日（13日間）	**調査区分**	確認調査
報 告 書	刊行予定なし	**処　　置**	用地買収後再調査

立　地

遺跡は，標高 2 ～ 20 mの木場川南側の緩やかな傾斜地に所在する。遺跡西側は，宮ノ川と呼ばれる湧水池が今も残るが荒れ果てた状態で放置されている。水道の普及する以前は，周辺集落の飲料水として使用されていた。町道を隔てた北側は，雇用促進住宅・町営住宅等の生活施設及び体育館を設置している。また，この東側は，国道 204 号が南北に伸びている。遺跡後背部の南側丘陵部分は，ほぼ全面畑地として現在利用されている。



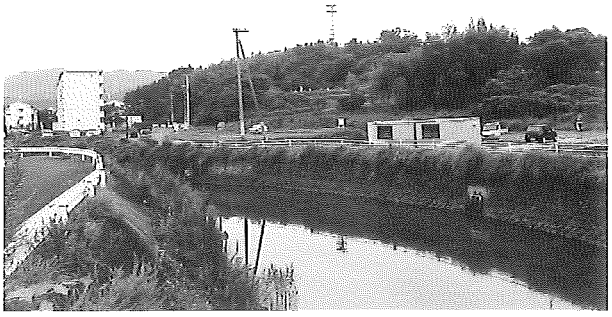
末永遺跡位置図［佐世保北部］（S=1/25,000）

平成 9 年 3 月に県学芸文化課で分布調査を実施した際に，石核再生剥片・黒曜石剥片を採取した結果，新規の遺跡として登録を行っている。周辺の畑地では，黒曜石剥片の他に須恵器片等も散布しており縄文時代から生活の場として利用されていた状況が想定された。

調　査

調査区を大きく 3 区に区分し，遺跡東側の標高が高い部分を東区とし，調査坑の名称を TP- 1 ～ TP-7・TP-12 とした。東区から伸びる丘陵西側部分が新設された町道によって切られるまでの間を西区とし，TP-8 ～ TP-11・TP-13 とした。宮ノ前区は，新設の町道西側の水田として利用されていた部分で TP-14 ～ TP-18 の調査坑の名称を付して調査を実施した。

層序は，東区の高い部分が 40 ～ 50cm 程埋土されていて，黄褐色粘質土と灰色の粘質土のブロックが混ざり合った状況を呈していた。西区の TP-10，TP-8 は表土層下は砂岩の地山となっていた。

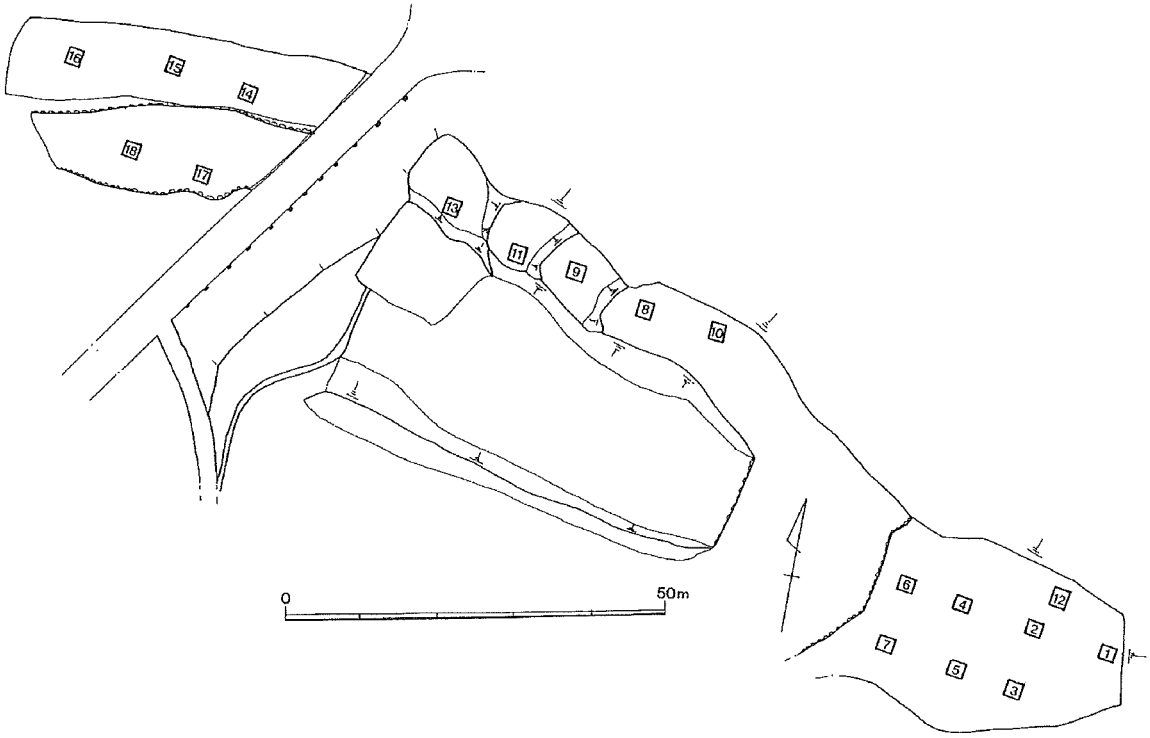

遺跡全景（西から）

調査風景

TP-11・TP-13 は，比較的耕作土が厚く堆積しており，TP-11 からはピットを検出している。宮ノ前区は，遺跡北側にある雇用促進住宅を建設する際に，耕作地が道路より低くなるため埋め立てを行っていることが確認できた。耕作土以下の埋め立ての状況は，約 140cm 程を礫と粘質土を入れて嵩上げを行っていた。埋め土以下は，明黄褐色粘質土に砂岩小礫が混じる地山が堆積する。

遺構は，TP-11・TP-13 にピットを確認している。この内 TP-11 のピットから土師器片が出土している。

調査坑からは，黒曜石剥片，近世陶磁器片等が 50 点程出土している。



調査配置図(S=1/100)

まとめ

調査は用地買収が終了し，耕作物が作られていない箇所について行っており，遺構・遺物が残存する可能性のある西区南側については調査が実施できなかった。

このため，未調査部分 1,758 ㎡については，用地及び耕作物等の問題が処理された後に再度調査を実施する必要がある。

【調査担当：町田・川鍋・松尾】（文責：町田）

報告書抄録

ふりがな	ながさきけんまいぞうぶんかざいちょうさねんぽう 14
書名	長崎県埋蔵文化財調査年報 14
副書名	平成 17 年度調査分
巻次	
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第 191 集
編集者名	和田政則
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒 850-8570　長崎県長崎市江戸町 2-13　TEL　095-894-3383
発行年月日	西暦 2007 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
万才町(まんざいまち)遺跡など 16 遺跡	長崎市 万才町(まんざいまち)ほか							

長崎県文化財調査報告書　第191集

長崎県埋蔵文化財調査年報14

〔平成17年度調査分〕

平成19年３月30日

発　　行　　長崎県教育委員会
長崎市江戸町２－13

印　　刷　　(有) 合 同 印 刷